川柳雑誌

麻生路郎★主宰

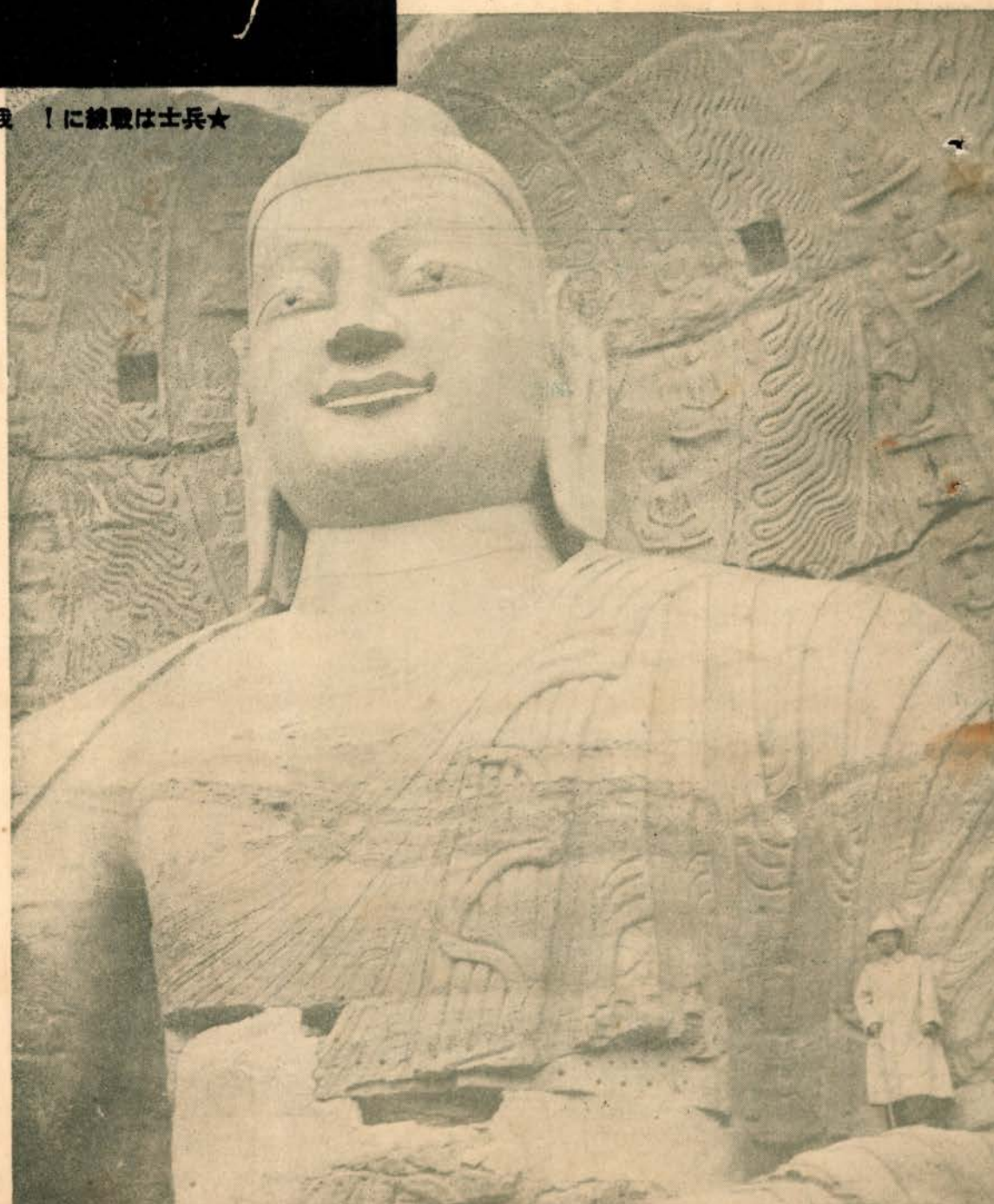
最高權威の月刊柳誌

人生勉强の標識燈

本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

（昭和十二年三月三日第三種郵便物認可　昭和十四年九月十五日發行　第十六卷第九號（毎月一回十五日發行））

★兵士は戰線に！　我等は銃後に!!　（國民精神總動員）



188

第十六卷　第九號

毎月十五日發行

武田發賣品

胃酸過多症・胃痛に

鎮痛 制酸

ノルモザン錠

ノルモザン錠の治療作用は、服用後先づ胃の粘膜を被覆防護し、次ぎに分解して過剰胃酸を吸着し或は分泌腺を收斂して胃液の分泌を抑制するにあり。又本劑はロートエキスの配合により胃痛を緩解す

【主治効能】胃酸過多症、溜飲、胃痛、胃潰瘍、胃痙攣、便秘、悪酔、二日酔、飲み過ぎ等

【價格】一日分(三〇錠)一二日分(四〇錠)一週間分(一圓)一六日分(二圓)一ケ月分(三圓)六ケ月分(六圓)

發賣元 武田長兵衛商店 株式會社

大阪市道修町 (三一町目事務所 天滿支店)

33(2)212

安産のために

姙娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

ワダカルシューム錠

大阪道修町 和田卯助商店

樹林醫學博士 推奨
片瀬醫學博士 監査

産婦醫學博士著「安産のために」冊子呈上

麻生路郎主幹と中島生々庵博士（生駒山頂青年道場にて白面人氏撮影）

不朽洞句抄

麻生路郎

御苦勞の聲も聞けない獨り者
色褪せた紹の羽織とはなりにけり
誰が出てもあかんと思ふ日もあらむ

宣戰布告のイギリス

少し離れて拳骨を振りまはす

歐洲大戰へ帝國不介入

阿部さんはハッキリ支那へ向き直り

平沼前首相へ（三句）

★内外時事★

本欄設置の辯

三年、五年、十年と月日が流れて行く。その頃になつて、何故こんな句が生れたのだらうか。こんな句が生れた頃はどんな御時世だつたらうか。最も簡單に、それに答へてくれるのが本欄である。本欄によつてアウトラインを知れば更に詳しいことは調べるのに幾らでも方法があるからである。（編輯局）

★平沼内閣總辭職（八月廿八日）
☆阿部内閣の誕生（八月廿日）

内閣總理大臣	阿部信行
外務大臣	遠藤柳作
内閣書記官長	唐澤俊樹
法制局長官	

★阿部首相自主外交を闡明（八月廿一日）
☆蒙古聯合自治政府成立（九月一日）
★東京震災記念日（同日）
☆初の興亞奉公日、酒なしデー（同日）
★篠原弘道准尉は八月二十七日の空中戰で五十八機撃墜を名殘りにノロ高地上空の花と散る
☆歐洲大動亂の火蓋切らる
英佛對獨宣戰を布告（九月三日）
★歐洲大戰勃發に對し日本は不介入方針を中外に闡明し、專ら支那事變解決に邁進（九月四日）

川柳雑誌 **10月の會は3日** 大寶寺町 於 **誓得寺**

兼題「孫」路郎選「地圖」夢裡選

内務大臣	小原直
厚生大臣	青木一男
大藏大臣	畑俊六
企畫院總裁	吉田善吾
陸軍大臣	宮城長五郎
海軍大臣	河原田稠吉
司法大臣	伍堂卓雄
文部大臣	永井柳太郎
商工大臣	金光庫夫
農林大臣	
遞信大臣	
鐵道大臣	
拓務大臣	

趣味の古本屋 鬼文堂 心斎橋筋西へ二丁北側

★川柳人時局隨筆

エラー

森東魚

夜叉郎の云ひ草ぢやないが、「しくぢつたショート何やら云ひは云ひ」――で、ハッと思つた途端にさ何とか云ひたい、申譯け、それも自分に肯けるだけでいゝ言譯けがしたいぢやないか――

私はね、此の間とんでもない失策をやつたんですよ。

私のパーティーの一人に召集令が下つたンです。皆ナ張り切りました忽ち國旗が用意されたンです――一つ、武運長久と書いてやつて呉れませんか、さう云つて肝いりの若者が私に眞新らしい國旗を持つて來たンです。ようしッ書かう、私は、すつかり張切つて請合つちまつたんです良い氣になつて、甚だあやしい達筆を振つてしまつたのです。すると、どうです、エエ、武運の運の字を書き落してしまつたぢやないですか、

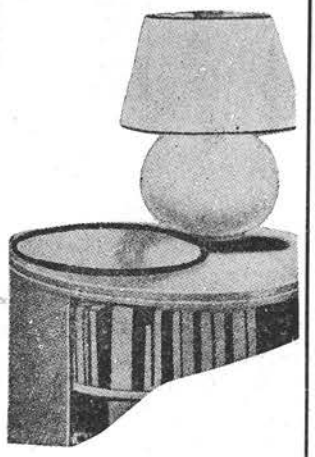
私は眞青になつたらうと思ふ程、顏も心臓も冷めたくなるやうな氣がしました、「運が無い」困つた事になつてしまつた。然かも十數人の人が既に赤心を披瀝した名前を連ねて居るではありませんか――全く困つた、困つた、申譯ない事をしてしまつた。何とかならないかなァ――と思ひ續ける數分間を想像して下さい。事柄が事柄ですからねエ、私の頭の中に異常な渦が卷きつゞけました。さうして軈ての後に、私は前の紙にかう認めて、ほつとしたのでした。

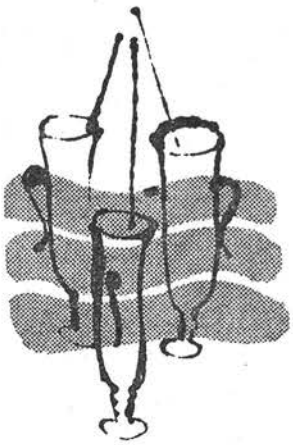
書き落す運の一字は天に在り神様まかせ征けや强者

これで勘辨してくれ、勘辨して呉れ、さう云つて私は、その肝入りの若者に低頭しつゞけたのでありました。（昭和一四、八、一二）

川柳雑誌 目次

表紙寫眞……（大同・石佛）……岩崎柳路
内外時事……梅本秋の屋
武玉川三篇研究（三）……森東魚……（三）
樺太にて……淺野杢介……（八）
昆布小岩……安川久留美……（八）
エラー（川柳人時局隨筆）……森東魚……（一）
佐々成政……酒井斗風……（八）
川柳横町……不死鳥……（三）
月評 川柳一ト筋……
つれづれ……吉田水車……（九）
演劇・映畫に川柳を觀る……水谷鮎美……（九）
子供と想……石崎柳石……（九）
隨筆數題……小山文三……（九）
肥的痩的一塊兒的三天……戸田孤篷 石井白面人……（四）
★
近作柳樽……麻生路郎選……（五）
川柳塔……麻生路郎選……（一〇）
同舟近詠……諸家……（一四）
不朽洞句抄……麻生路郎……（一）
一路集……洋書……長野文庫選……（一一）
各地柳壇…………（一六）
後記……（表三）……社關係の人々……（表三）
柳界展望……（一四）
川・協……（一六）
川雑案内……（一四）





川柳一ト筋

月評

某人・鋭々・孤逢・豆秋
鮎美・白面人・亞鈍・夕鐘
里十九・路郎

亞鈍—先生！丹路君が未だ見えないとすると今晩の司會は誰がします？

路郎—豆秋君に頼まう。

豆秋—ぢや丹路さんが來るまで私が司會しませう。鮎美さん！ではお隣りから順に一つ……

鮎美—そうですか、それでは……

鮎美提出＝近作柳樽

月が出て故郷の話になつて來る　月原宵明

鮎美—宵明さんの句が八句出てゐるが、皆優れてゐます。その中で特に「月が出て……」の句、えーこれは北支に活躍されてゐる月原宵明さんが第一線の現實の生々しさ、現實の生々しさから拔け出てくる非常に餘韻のある句であつて、結局は人間がこの一句に集められてくるのぢやないかと思ひます。精しく説明する句ではなくて、口ずさんでゐると非常に佳いと思はれます。それ丈け——

某人—この句の力は突つ離してあるところにあるのぢやないか。斯ういふ句を作る境地にあると、どうしても感傷的になつたり、表面上に考へ深げなものを持つてきたりし易い。それがこの句では全然現はさずに、「話になつて來る」とそれなりに突き離してあるところに、この句がありきたりの句にせず、面白いものにしてゐる。——それから、「故郷の話になつて來る」といふ表現で、時間的なもの、つまり、（月が出てから月が出たからではなしに）ぽつ〳〵話を自然に故郷へ向いていつた、その時間的、心理的なものが窺はれて一讀、井伏鱒二か、尾崎士郎の小説を讀んでゐる感じがする。

路郎—大體前者の意見で盡きてゐると思ふが、この句境はどつちかと言へばロマンチックなもので、句境そのものはそれ程珍らしいものぢやない。例へば上杉謙信の「さもあらばあれ家郷遠征を憶ふ」と同じ境地だと思ふ。しかし「月が出て……」が北支戰線にてといふ前書があれば、やつぱり力強いものがあると思ふ。まあこれ位で宜ろしいかな。

孤逢—遲くなりまして——。（孤逢出席）

豆秋—ではこれで、次に移りませう。白面人さん、如何です？

白面人—いやアー私など。

路郎—ぢや、僕が出さう。

路郎提出＝近作柳樽

肋骨あはれ洗濯板に似て　西野みづほ

路郎—えーと、この句は字足らずの句であるけれど、作者の病を靜觀してゐる樣がよく出てゐると思ふ。しかも自分の肋骨ーあばら骨ーを撫つて洗濯板といふ表現を示す透徹な觀察には敬意を表したいと思ふ。

白面人—先生！肋骨をあばら骨としたら、字足らずになりませんね。

路郎—ふうん……。そうだねだが僕は肋骨と讀んだ方が調子が強く出ていゝと思ふね。

白面人—では肋骨と讀みますか。

路郎—さう。肋骨の方がいゝ。

白面人—あばら骨ぢや、すうーつとして弱いですね。

路郎—肋骨のとしたらどうかね。

白面人—どうも川柳を讀むといふことも仲々六ケ敷しいですね。

夕鐘—作者は、あばら骨のつもりでせうね。

豆秋—先生の評でこの句が生きますね。

白面人—目から入る感じと耳から入る感じがありますね。

某人—それはありますね。

鮎美—下の「洗濯板に似て」で肋骨と對照して生きてゐますね

某人—この洗濯板といふ奴が適確に飛びこんでくるんですね而もこの洗濯板は新しいのでなく、白つぽく、さゝくれた、それだと思ふ。さういふ聯想が動いてこの句の現してゐるところが何か物凄いものを持つてゐるやうに思はれる。例へばギザ〳〵の比喩にしても、もつと他のものがあるのに違ひないが、そこへ洗濯板ともつて來たのは單に手近なものを出したのではなく、よく〳〵すりきれたもの其奴に作者は言外に何ものかを現したんぢやないかと僕は思ふんです。

豆秋—もう、この句に就て何か？じや、次に移りませう。誰方かもう一句近作でお願ひします。

夕鐘提出＝近作柳樽

押賣りの汗へうつかり味方する　高峰柳兒

夕鐘—この句を一讀した自分は、柳味の横溢してゐる句だと思ひました。押賣といふものは大體敬遠を、皆、するものですが、この場合、あまりの汗に、「汗を入れていつたらどうですか」とうつかり言つて了つて、押賣の方が上り口へ腰を掛けてしまつた。斯ういふ情景が、まざ〳〵と私に感じられました。「うつかり味方する」といふ言ひ廻しは、何でもないやうですが、この場合、非常によく言つてゐると思はれます。

某人—此句は、以前の大門さんの句によく似てゐますね。以前のと言へば一寸具合が悪いから取消しませう。

豆秋—この味方するといふのは傍に居合せた、第三者が精神的に味方するといふ風にとれませんかな。やはり押賣りする方ですかね。

某人—しかし、さういふことも考へられん事はないですが、この場合、すぐくるのは被害者の……笑聲……押賣りする方ですね。

鮎美—つまりこれは人情味を持たせた、やはり日本人たるところですね。

夕鐘—これで思ふのは、まだ物を買つてませんね。

某人—これから買はされるんですね。

夕鐘—汗の出てゐるところは表戸から、入つて來たとこですね。

里十九—これや、やつぱり何んやろ。物賣りが汗をかいて這入つて來たとこで、よく氣の付いた句やな。

豆秋—經驗ですか？（笑聲）

里十九—われ〳〵もよく前に物を賣りに行つたからな。夕鐘君かて、呉服を擔いでよく出てるさかいな。

豆秋—僕は乞食になつたことはないが、しかし、うつかり乞食に味方して一錢呉れてやつたりして女房に叱られるー（笑聲）

豆秋、鮎美—非常に人情味のある句ですな。（同時に聲あり）

鮎美—豆秋さんの「秋風の中で乞食に拜まれる」あれなど味方してますね。あれは名句でしたな。

某人—家へ歸つたら乞食も金持みたいや。

里十九—乞食もそうやが、夕刊賣りの婆さんは大分金をこしらへてゐるさうやで（註、大阪四ッ橋の昔からの夕刊賣）

××—息子は大學へ通つてゐるさうな。（筆者失念）

豆秋—つまり有閑マダムか（夕刊マダム）——笑聲——（鋭々出席）

路郎—此の句では、買はされたといふんでなしに、うつかり味方するといふ心理の巧みさを味つたら充分だと思ふ。大分に話が面白く、つぎ〳〵に出ましたが、句そのものから言つたら今言つた事だけで充分だと思ひますな——。それぢや川柳塔へ移つて貰ひませうか。

豆秋—川柳塔と、同舟近詠と一緒に、しませう。

某人—川柳塔から私出します

其人提出＝川柳塔

東山動物園にて（名古屋）

噴水へ旅の疲れのあからさま　石會根民郎

某人—この句は前書が附いてゐますけれど、前書がなくつて

も情景のはつきりする句だと思ふ。句境としては別に尖鋭なところはないかも知れないが、此句に漂ようてゐるペーソスなんか、非常に面白いと思ひます。一寸一頃のチャツブリンの映畫のおしまひみたいな寂しさがあつて、視覺的に讀む者に迫つてくるものがあるやうに思はれます。それ丈。

鋭々—これは噴水へといふだけで、前書がなければ公園でといふ戸外の句だとはつきり判るでせうか。

鋭々—大體前書があるために判つてくるのではなしに、すつと判つてきますか？

某人—ええ。判りますね。といふのは噴水といふものは、あつちにも、こつちにもあるものと違ひますからね。

鋭々—それや、そうですね。たゞ戸外とか、公園とかが、すぐ泛べば可いですね。旅館とかホテルの噴水ぢやないですね。

孤篷—これは旅行鞄など持つて、ベンチに埃りだらけになつて○れ、ションボリ疲れ果てゝ噴水をみてゐるといふ句ですね。ホテルなどで、シュうとした服裝は泛びませんな。

豆秋—動物園へ行つても動物など見る氣もなくて、ぼんやり噴水をみてゐるー。

鮎美—私なども一人旅をよくしますが、疲れて公園などのベンチにボンヤリしたりしますから、此句は前書なくても公園の噴水ですね。

白面人—もう動くのが厭になつてくるんですね。

豆秋—先生！何か。

路郎—何んにもありません。

豆秋—それぢや、誰方かー。

孤篷—ぢや、さつき言ひかけました同舟近詠の句で、一句でなく、全般的な句評になりますけれど……

孤篷提出—同舟近詠

隣顔—廿六句　　前田五健

孤篷—五健さんの今度の「勝頗」の句ですが、我々の見たこともない假空な河童を引つ張つてきて、じめ〳〵した場所、その一つを、取つてきて自分の言ひ度い事を河童に言はしてゐる理です。此間白面人さんと旅行した時に、「少年の好きな少女がゐた曲馬團」といふ句を白面人さんが作りましたが、村に一遍くるか二遍くるか知れない曲馬團の娘に、村の子供が淡い戀心を感じるといふのを想像したものですが、川柳は寫生の句だといふことですが、假空や空想で、寫實的な美しさでなく、作り上げたもの、それもコネあげたものではなく、藝術的な、自分の主觀を映し出すといふ作句態度が非常に面白いと思ひます。例へば前に映畫を川柳にしたトランプ譚の、あゝいつた人間の現實世界にあり得ない假空的な物語りが藝術の世界で許されてゐる如く、河童といふ頭の上に皿を載せてゐる、あれをもつて來たところに非常に面白いと思ひました。

某人—結局、この句は芥川龍之介の河童のやうに、前田五健のものぢやないですか。

白面人—これで仲々、よくカッパ(喝破)できますね。(笑聲)

鮎美—それでカッパン(活版)になつたか。

豆秋—あの前田五健にしてはへのカッパでせう。(哄笑)

鮎美—亡くなつた伊藤愚陀君の「河童同志愛の言葉は泡になり」あれは名句でしたね。

白面人—豊かな想像力が出てゐますね。

路郎—これや、やつぱり五健さんの手腕ですな。普通の人ならこれ丈け、發表できませんね。

夕鐘—これや、作爲でなく、やつぱり心境ですね。

路郎—それや、そうですね。

白面人—課題吟に出ても、これ丈け面白い句が集るかどうかは判りませんね。——それぢや僕一つ出さして貰ひます。

白面人提出—川柳塔

海の大きささあ嘘をつけ嘘をつけ　　奥村丹路

白面人—これは、海といふ大きなものと、人間の小さな嘘と、大小の對比を面白く持つてこられた佳い句だと思ひます。

孤篷—「海の大きさ」といふので思ひ出しますのは徒然草の始めの方にある「物云はぬは腹ふくるゝわざ」と同じで、あれを讀んでゐると、安心して世渡りが出來るやうに思はれます。非常に人生に餘裕があるやうで、決してこの嘘は教會堂にある懺悔台で口籠るやうな嘘でなしに、海の中へ嘘をなんぼでもしまつてしまへるやうに思へます。

某人—この句は二つの解釋がある。今の孤篷氏が海の大きさに自分の心の中の嘘をぶち撒けるといつたものと、今一つは小さな嘘に囚はれずに海の大きさになんぼでも嘘をつけといふのとね。——しかし嘘をつきに、わざ〳〵海までゆく必要がないと思ふ。

孤篷—此の世の中で嘘をついてゐる。海へ行つて懺悔する安心して嘘をついて可い。こせ〳〵するなといつたものでせう。

鋭々—私が讀んだ感じは海の大きさをみて、自分の心の大きさを歌つたものと思ひます。なんぼでも嘘をつけ、海は大きいといつた風に思ふ。

鮎美—先生！これをイコールすると先生の句の「豚の子は海の廣さに引き返し」あゝいふ句になつてくるんぢやないですか。

路郎—うーん。一寸違ふね。

夕鐘—海の大きさに自分は餘りに馬鹿正直に見え、自分を叱りつけてゐるやうにとれる。

某人—それが一番始めにくるもつとも正しい受け方だと思ひますね。

孤篷—しかし鋭々さんの說のやうにも感じられますね。

鋭々—一寸初め○○さんの云はれたやうに、まづ受け取れますが、たゞ人に嘘をつけといふのと、自分に嘘をつけといふのと違ひですが、自分に云ひ聞かしてゐるものとすると、じつと考へてゐますと、それでは最初の「海の大きさ」といふ語がぼやけて了ふ。

鮎美—さつき先生の句を申しましたね。あれと、この句の違ひを訊きたいんですが。結局はイコールしてみますと、あゝいふところを丹路さんは觀てゐるんぢやないですか。

某人—それは積極と消極の違ひで、海の廣さと自分の小さゝで引返すこの句はプラスであるし、豚の句はマイナスである。さういふ違ひがあるやうに思はれます。

路郎—結局自分の弱さをとつちめてる句ぢやないかな。

某人—さうなんです。それで開き直つて、そんなら、といつたもの……。

路郎—これで大分速記出來ましたか。

亞鈍—えゝ相當に書けました

豆秋—今晩は一般論は止しますかね。

路郎—九月號は原稿がかなり輻輳するから、これ位で可いだらう。

豆秋—それぢや、速記拔きにして、自由に、さあ嘘をつけ嘘をつけでやりませう。(笑聲)

(亞鈍筆記)

町横柳川

不死鳥

ションに出かけるらしい。ヨレヨレの純綿？の衣裝に身を包みチョン髷に禿げつちよろけた大小刀をたばさんで時代錯誤の面貌を白晝憶面もなく車中に晒らしてゐる。どうひいき目に見ても氣違ひ染みてゐるが、彼氏等彼女等一向そんなことに頓着しない。油坂でドヤ〳〵ゾロ〳〵と下車してしまつた。ああ好きなればこそである。

★冷房裝置がどうの斯うのといふ連中が、蒸し暑い寺の一室に壽司詰になつて、句作に耽つてゐた昨夜の柳友の姿が私の眼底に、まざ〳〵と浮ぶ。これ又、好きなればこそである。

★校正に奈良まで來る。なんでもないやうでなんでもないことではない。社の机の上に頬杖突いて、校正の來るのを待つてゐても、來る時には來る筈だが……それでは滿足の出來ないところに、いのちがあるのだ。私たちは佛像をきざむやうな心もちで、雜誌を創り上げてゐるのだ。

★毎月奈良へ來るたびに晝飯の時間をぬすんで、古美術店を覗く。欲しいものがあるが買へない。私の力で買へさうなものは欲しくない。それで毎月觀るだけで滿足してゐる。今日、私の眼を射たものは相當に古びた矢大臣の像である。木辻あたりで遊び過ごした神主が賣り飛ばしたのかも知れない。買つてどうする譯にも行かぬが一寸買つて見たい氣もする。變な好奇心が湧いたものだ。

★大軌のあやめが池で、私たちの車へ、全勝キネマの連中がドヤドヤと乘り込んだ。どつかへロケー

肥的瘦的一塊兒的三天

——奥津温泉・湯原温泉——

戸田孤蓬
石井白面人

旅に出るとなると子供つぽくはしやぎたがる孤蓬、机の上にひろげたのは岡山縣の地圖。旅行案内と首つ引きで姫路から斜に津山へ拔ける姫新線を赤鉛筆で塗りつぶして行く。

赤鉛筆流れて白い旅の地圖　孤蓬

昭和十四年七月二十一日、南海線住之江驛に先着の白面人氏、孤蓬がヘルメットに白服、ステッキで現はれると「印度の總督みたいやなあ」とけつたいな挨拶ともつかぬことを云ふ。

約束へ今日は變つた風態で來る　白面人

「いこか」「いこ」で決つた旅

難波に着いたのが大阪驛發車のかつきり一時間前。「飲もか」「飲も」で喫茶店へ入る。飲物は孤蓬の好物クリームソーダであること勿論だ。

簡單に贊成をして喫茶店　白面人

大阪を出て三の宮までの二十五分間を、私達は所謂大陸通なるものから話しかけられて弱らされた。由來、通がる奴に限つて智識は淺い。本當の支那通白面氏、默々として何やら鉛筆で書いてゐたと思つたらこんな句をこさへてゐた。

相槌をうたせて周邊憚からず　白面人

列車は快適のスピードで須磨・舞子、明石を過ぐ。

海の歌ビーチパラソルからも洩れ　孤蓬

別莊は鎧戸閉めたままの晝　同

播磨印南野を車窓から眺めながら更に西へ西へと向ふ。

看板を追ふて話題のない車窓　白面人

バスだけがやつと生きてる町の驛　孤蓬

やがて列車は姫路に着く。流石に都會らしく吐き出される大勢の旅客の、むれるやうな汗と白粉の香ひの中に揉まれながら陸橋を渡つて姫新線に乘換。

お土産の箱に納まるお菊蟲　孤蓬

乘換へて先刻の人と口をきゝ　白面人

姫新線は隧道が多い。無聊のまゝに席題「汽車」「トンネル」を出して作句。苦吟また苦吟。

驛近し汽笛に人家窓を開け　孤蓬

トンネルを出ると光つた水の色　白面人

姫路で買つた汽車辨の温かかつたのには、ほんとうに有難い氣がして一粒も殘さず喰べて仕舞つた。孤蓬健啖なるためのみに非ず。山峽を喘ぎながら行く列車の車窓の左右には、水のない田が散見してゐるのだ。

汽車辨の温味へ感謝する銃後　孤蓬

植ゑつけを案じて寄越す軍事便　白面人

秋の出廻り期には米が安く、端境の夏は米が高い。安い米だけを賣つて仕舞つては農民は顎を刺される。產業組合がある。農業倉庫がある。地主が產米と現金と引換へた質物が銀行の名を書いた倉庫に詰つてゐるのだ

農民の汗を奪はぬ驛の倉　孤蓬

列車は播磨美作の國境へ上つて行く。

各々の姿になつた三等車　白面人

驛々々みんな勇士の征つたとこ　孤蓬

午後二時八分津山着。今をときめく平沼首相を生んだこの町は松平氏の封地。十萬石の御城下だ。下車して驛前から奥津行のバスに乘る。

改札を首相氣どりで通るなり　白面人

山の湯へ片道買つた女連れ　孤蓬

バスは津山銀座の稱ある繁華街を通り、暫らくして長い松並木にかゝる。

橋筋と比べ盛り場通り拔け　白面人

兒島高德の十字の詩で有名な院の庄は奥津行のバスの左手の畠中に鬱蒼とした老樹に闇まれながら作樂神社として殘つてゐる。

草に樹に涙催す院の庄　白面人

津山から山間八里、一時間半をバスに搖られ通して奥津温泉に着く。宇垣一成氏が年に一度はこの山の湯を訪れることは有名だ。河鹿園に投宿。兎に角温泉だ温泉だと旅裝を解くもそこそこに浴槽へ案内して貰ふ。

人間はみな温泉の色になつて暮れ　孤蓬

宇垣さんのためにしたのでもあるまいが立派すぎる宿の浴槽と異つた趣きを味はひに洗濯場兼露天湯へ出掛ける。こゝは安全剃刀を使つてゐた村の人が一人ゐたゞけだつたが、孤蓬黄昏の中に光る温泉の色の誘惑に耐へ兼ねて、前巾のあはぬ浴衣をかなぐり捨てると巨軀を沈める

大阪は何處かと露天湯で訊かれ　孤蓬

露天風呂寫眞一枚撮らされる　白面人

晩飯を淺酌へと延長してまづ奥津小唄を聽く。酒は全然駄目な白面人氏、二三杯で赤面人となりながらも既製の奥津小唄に滿足せず、忽ち自家の印象で作詞、これを發表して絃にかける。曰く「奥津來て見リャ瀨音に更けて夢に河鹿の忍び泣きヤーレヤレソレ忍び泣き。一度來たのがつい二度三度積もりや奥津の泌む情、ヤーレソレソレ泌む情。」

即席の小唄へ酒は冷え切らず　孤蓬

お土產にする氣小唄を繰返し　白面人

（第一日　孤蓬記）

河鹿園に一泊。宿の眞下を流れる吉井川の涼々たる響が、夜もすがら枕に馴染めぬ耳をうちつゞけて、寢苦しいまゝに朝を迎へる。

せゝらぎか雨か眠れぬまゝに朝　白面人

寢不足の眼をこすりながら湯槽にひたる。僕等の下の部屋の二人連れがまたしても話題に登場する。あとで女中さんに訊くことに一決。話題と云へば二十四貫六百の孤蓬氏に配するに十三貫四百しかない僕との對照が、嘸かし向ふのお腹を抱へさす種になつてゐるかも知れないと思ふと苦笑を禁じ得なかつた

どこやらが二號だと云ふ下の客　孤蓬

部屋へ戻ると朝食。早速僕等の觀察を話すが、女中さん笑つてばかりゐて取合はない。温泉宿と二人連れ——この剩身とわさびの樣な不可分にして、且つ頗る常識的な配合に感興をもつ愚を、女中さんの無表情から遲蒔ながら氣付いて、潔く話題を轉換することにした。

冗談もうちとけて來る朝の膳　白面人

朝食が濟むと孤蓬氏、バッグからクレパスを取出してお得意のスケッチをはじめる。年配らしい女中さんには學校へ通ふ子供でもあるのか、頻りにクレパスのことを訊く。感心な關心だとあとで孤蓬氏と洒落れる。

クレパスが別れて暮す子へふれる　孤蓬

孤蓬氏のスケッチの間、手持無沙汰で居たら、間もなく足踏み洗濯がはじまるからと知らせに來て呉れる。曾て大阪朝日に小石清氏の寫眞「娘天國」でこの奇習が全國に紹介されてから、一躍奥津温泉の名が温泉愛好者、寫眞ファンの間に喧傳される樣になつたものだ。對岸のスケッチに餘念のない孤蓬畫伯を誘つておつとりカメラで川端へ馳けつける。

寫眞機へ臆面もなく娘立ち　白面人

愉快だつた奥津に左樣ならをするべく宿を出て、津山行のバスを待つうち、とある土產物屋の前で昨夜も見掛けた療養に來てゐるらしい松葉杖の少年が、小犬と戯れてゐる無心な姿に心惹かれる。療養生活の無聊な日々を、犬はいゝ友達になつて心を紛らせ慰めてくれる事だらうと考へて、しんみりとした氣持になる。この水彩畫でも見る樣な淸純な風景に、奥津の印象をより好もしいものとして津山へ向ふ。今日は木炭バスだ。

温泉の町の晝　少年の松葉杖　孤蓬

昨日は遠く思はれたこの八里の山路も、今日は通過する村に記憶があるためか、搖れ通す一時間半が左程苦痛にも思へない。砂煙をあげて疾驅するバスを見送る村の子供の無邪氣な姿

近作柳樽

麻生路郎選

眼帶で來て漫才へ目が疲れ　兵庫縣　北川春巣
郊外の庭デバートの虫が鳴き　同
將軍の長男にして文科に居　同
大陸へ行けない譯に母が居る　同
遺家族の店に現金主義の額　同
バス降りて巡査威嚴を取戻し　同
婚約を戰地の友にだけ明かし　同
新聞を兒に破らせて嬉しがり　同
洗濯屋うちのは別の竿で干し　同
慰問團大阪譯も嬉しいぞ　南支　酒井美知夫
城壁の煙草日本の方を向き　同
一戰欲しいか軍馬もいないいて　同
彫刻のポーズで立つて居る歩哨　同
寢言もう支那語がまじる樣になり　同
午後六時支那も夕餉の煙が立ち　同
軍事便てれこ〳〵になつて着き　同
クリークの深さは濡れたかたで知れ　同
代筆は無事と賴んで病める戰友　同
落魄へふる里眼にしむものばかり　松山　宮内耕朗
日本のはてとはさびしき言葉なり　同

次女征子出生

產聲へ天も地もない朗さ　同
健かさ茶腕はかけてゐてもよし　同

歸鄕

盃の數を氣使ふ兄にして　同

K君次男出生

二人目も男日本の空靑し　同

南支那海

帆船をしばらく隱すうねりかな　同

針仕事涼しい方へ持廻り　愛媛縣　澤松巽天樓
內職の造花嫌ひな花もあり　同
抱き上げて子に入れさせる軍事便　同
交換手妻君のやうにぎなられる　同
國策へ隣は双兒出來ました　同
メーデーの旗振つた手で銃を執り　同
平社員この世界では顏が賣れ　同
纏足のいつそ哀れな負けいくさ　北支　月原寄明
同文同種の敵をあわれむ　同
泥濘の卷脚絆から乾いて來　同
赤とんぼ擔架を護衛する如し　同
赤とんぼ戰機はまさに熟し切り　同

山西省境山岳中にて

かゝる地を驢馬に跨る宣撫官　同
展望所今は空しく鳥ゐる　同
英靈に續く遺族も拜まれる　京都　福田丁路
聖戰を忘れたほろい儲け口　同
酒止めて暫し身體を持て余し　同
腹の立つ顏と竝んで事務を執り　同
生きてゐる證據の暑中見舞來る　同
にきび取り電光石火隱したり　同
決死隊愛馬と共に散る覺悟　大阪　山川富士
電氣博動いて見せるものばかり　同
商用の序に這るニュース館　同
野天風呂三助になり客になり　同
驛近うなつて車內が落つかず　同
千人針無事に動をたてるよう　同
叱られた子はカーテンを指に卷き　名古屋　鈴木可香
五十圓の家賃南に陽をうけて　同

に、下車して一枚撮りたくなる

惡童、善童みな日本を背負ふ類　孤蓬

やがて作樂神社が右に見えて來る。院の庄から例の古風な長い松並木を過ぎて再び津山へ入る。バツグ二つをバスに托してこれも鈴蘭燈に見覺えの繁華街で下車。正午には少し時間があるけれど兎に角食事をすることとする。格好の家を求めて彷徨一時間の後やつとそば屋に飛込む。

道訊いたついでにお城敎へられ　白面人

食後、汽車の時間までの約一時間を津山見物にあてゝ無暗に歩き廻る。お菓子屋の多いことに氣付いて、お土產にする氣で孤蓬氏と入つた竹細工屋で「津山は甘黨の町ですね。」と云へば、竹細工屋のおつさんどう感違ひしたか昂然として曰く「津山は政府黨で御座いますよ。」

名所名物、何の首相の出た誇り　白面人

お土產の用は驛前だけで濟み　孤蓬

午後二時三十一分發で中國勝山に向ふ。中國勝山（チウンクオンショウサン）なんて支那みたいだと話し合つてると、果然白衣の勇士一人を見掛ける。饒舌を止めて一瞬緊張する。

傷病兵何に夏焦けでない黑さ　孤蓬

湯原は勝山町から山路を北へ五里。こゝのバスも御多分に洩れずよく搖れる。峠を越すとき乘客の一人がバスを停めて茶店で饅頭だのサイダーだのを買ふと、釣込まれて皆、我も我もと買ひはじめる。停車十分間のゝち湯原へ。このあたりの農家に名譽の家の多いのが、先刻の白衣の勇士を思ひ合はされて肅然となる。

溫泉へ行くに勇士の家を過ぎ　白面人

湯原も近くなつた頃、サーカスの掛つてゐる村を過ぎる。幟が旗が其處彼處に翻つて、一寸見るとお祭かと思はれるほどだ。年に一度か二年に一度か、定つて村へ掛るこの田舍廻りのサーカスの來る頃ともなれば、平凡な日常に飽き〳〵してゐる村人はその噂話をどんなに樂しく交はすことだらう。そして興行が濟んでサーカスの行つた後、天幕の張つてあつた村はづれの廣場に、アーク燈の光に觀た肉襦袢一枚の少女の四肢から、うけた息苦しいまでの興奮を想つて、夢を追ふ樣な矚をしながら佇む少年もあることだらう。

少年の好きな少女が居た　曲馬團　白面人

湯原溫泉は旭川に面した閑寂境。露天風呂から釣が出來るほとだ。水島館に旅裝を解く。土曜日であつたためか宿は滿員の盛況たつた。

宿帳に船場の人を見つけ出し　白面人

食べるものが何もない割に酒だけはよかつた。晩飯のお給仕に出た女中さんが、中譯なさ相に土地の言葉で不便なところだと喞つ。その代り人情の純朴なのは、澤庵の味を賞めたら早速お鉢に山盛り持つて來て呉れたのでもわかる。

酒の名を愛想に訊いた貸浴衣　白面人

寢る前に露天風呂へ出掛ける。痩せてゐる僕には夜の方がいゝ。風の音、水の音、仰げば夜空一杯に燦めく星。岩に頭を凭れさせてゐる耳に此處も河鹿が飽かず聞はるのだ。

溪流へ砂湯へ風が蕭々と　孤蓬

夕立へ傘もつて來る露天風呂　白面人

宿はありがたいことに蚊が居ない。隣の部屋で先刻（さつき）まではず

私淑する人の或日の二夕心　同
女將から金を政府へ賣りませう　同
洗濯の盥に映る雲も秋　同
子はいとしいま泣かされた子と遊び　同
稲妻の光が遠い涼台　大阪　夷一笑
月見草、時報の鐘がきこえます　同
斷水の神戸でお茶をよばれて來　同
夏やせの骨が氣になる海水着　同

親友の出征

俺の分もたのむは虫のよい話　同
蚊にくはれながら戰地へ初だより　同

敵屍

お前らも敵から云へば勇士だろ　岡山　尾崎綠柳
來世には蔣介石にまよふなよ　同

行軍

も一息今日の豫定を歩き拔こ　同

病床雜句

戰友の原隊服歸うらやまし　同
北中支歩いた之の足が立てず　同
病室の窓下を赤いパラソルが行く　同
戰鬪帽くず屋の顏によく似合ひ　大阪　戸田孤篷
解剖を愉しんでゐる女の眼　同
もたいなや兵をみなれし眼となりぬ　同
似すぎてる顏を見つけた宿の畫　同
山へ行く電車へ野菜の籠とのる　同
神となる一歩手前の星の下　下關　中村九呂平
郵便の數が殖えたり未亡人　同
未亡人總てに涙もろくなり　同
未亡人今日も寂しき日記なり　同
海水着去年の色で兒ははしやぎ　同
泳ぐ兒をほつかりそれて浮く西瓜　大阪府高石町　米本貴志子
炎天の町にながれる愛國歌　同
ちん〳〵をおしへる人のほがらかさ　同

高野行雜感

高野まで行くに鞄の大三つ　同
入浴の案内は切れる順と知れ　同
お隣へ片手ない子が越して來て　松本　小宮山雅登
ひと雨をたよるその瞳が小作にて　同
詩になぜか頼る朝の切花よ　同
戰地からその後を訊かれあわてたり　同
頂上に立つと萬歳口をつき　大淵　武田京司
星三つ父母へ土産が出來ました　同
貧しても子供にあまい親であり　同
もうけたいさて人情もすてられず　同
實習生一人を呼べば皆が來る　大阪　阿萬萬的
赤い屋根妻が鞄を持つて出る　同
負けたとは云はず妥協の策をねる　同
ふるさとへ歸る女給の喋らない　同
女の眼雲を見てゐるのではなし　豊中　阿部閑生
引汐の臭ふ手摺に殘される　同
草花の中に亡き子の寫眞あり　同
氷水ブリキの匙ぞなつかしき　同
援蔣を見限り華僑店普請　ホノルル　前山北海
偉くなる以外に二世の道もなく　同
迫害と無理解堪えて二世延び　同
又暗く條約廢棄二世聞く　同
暑いかと笑つて雲の峯くずれ　松山　芝田靈子
及腰そんな事では勝てません　同
つばめ巣立つ迄轉居日延する　同
現實と理想背伸びはして見ても　同
蟬が鳴く今日を限りと蟬が鳴く　廣島縣竹原町　西野みづほ
病人と見られたくない胸を張り　同
天日も暗し軍需の煙立つ　同
妻は椽に、蛙聞くなり俺は蚊帳　兵庫縣　戸倉普天
氷屋の喧嘩鋸振り翳し　同
流し元坊やは西瓜見付けたり　同
謄寫版すつてすつて銃後の村役場　大阪　西尾栞
そんなん氣にしなと溫度表をとり　同
シャボン玉お凸の上ではちけたり　同
小説へしばし女は泣きたがり　大阪　岩崎水虹
子が出來て蚊帳の狹さを笑ひ合ひ　同
卷紙へ貧しさ迫る筆を持ち　同
年增から誘ふ社長の隱し藝　東京　田中青風
勝報を待つ輪轉機よく光り　同
仲の好い小僧射的の彈を分け　同
薄情を言つて男は得意がり　大阪　平川久枝
卷紙へ嘘とは見えぬ字を並べ　同
松葉杖師走の街でぢやまにされ　同
何の爲めに生きてゐるのか金魚鉢　大連　松井物數寄

んでゐた五目並べも、興盡きたと見えていつか寢て仕舞つたらしい。昨日に續く今日の溫泉行に疲れた身體は、床に就くとすぐ眠氣を催して、瀨の音も河鹿も何のその、ぐつすりと朝まで夢も見なかつた。

寢るだけの慾で二日目無事に濟み　白面人

（第二日　白面人記）

星の下に女も來てゐた露天風呂の戻りの途中から道連れとなつた無暗と女中さんを笑はせる。こゝの常客の×氏と別れて部屋に歸ると、旅の第三日の朝が來るまで熟睡。六時半砂湯へゆく。今朝の洗面器は旭川だ。

齒磨粉流れて今朝の瀨の疾さ　孤篷

九時半と定めた出發の前に、もう一度砂湯へ出掛ける朝湯の一しきり終つたあとの女人群像にいささか辟易する。女群を避けて白面人氏と記念撮影をする

露天風呂シヤターが照れるほどの裸女　孤篷

旅行バッグを持つて送り出してくれる宿の女中の一人がパーマネントをしてゐる。聞けば津山まで一日掛りでセットしに行くのださうな。

悪いとこばかり都會は眞似られる　白面人

同宿だつた陸軍中佐殿とバスに乘合はす。戰死者遺族弔問ださうだ。左腕の喪章が身をひきしめる。

峰越えて忠魂の家もう一つ　孤篷

バス搖れて搖れて無口のまゝの五里　白面人

例によつて早いバスで中國勝山町に着く。名産の高田硯を求めるべく町を歩き廻る。

驛前は人ずれのした田舍町　白面人

汽車の時間が悪いのでバスで津山へ出る。鐵道に並行したバスは汽車並の安い料金だつた。

ワイシヤツの汚れ氣になる旅にゐる　白面人

ガレージの用が仲々濟まぬバス　孤篷

指さした先にお城がまた見えず　白面人

（孤篷記）

三度津山に入る。湯原の宿で近付になつた×氏に教へられたローズ食堂で晝食を攝る。流石に津山隨一の店だけあつて、女給さんは美人揃ひの上に、出來るものも美味しい。たゞ意外だつたのは難波で食べてから此方久しく遠ざかつてゐる孤篷氏の好物クリームソーダにやはりこゝでも有りつけなかつたことゝアイスウオーターになんと一杯八錢もとられたことゝ、更に意外中の意外は、以前孤篷氏の家にゐた女中さんが結婚に失敗し

Sata Special Klinik
呼吸器病科
診療　毎午　日前
醫學博士　佐多愛彦　電北88
醫學博士　加藤謙一
醫學博士　螺良四郎　電話崎1151
内科
市電堂島中町停留所北辻西入
佐多醫院
大阪堂島北町　電北八二八四

片脚を興亞の礎石に置いて來た　同
夜の街時間いらない顔ばかり　同
徴用令丙種もお役に立つ姿　大阪　米谷松太樓
片足をベタルへ殘すひやしあめ　同
二階借下から嫁の話が出　同
夏痩せの床から嫁や子に當り　下關　櫻川不水
くび筋を伸ばし夜店の嘘を聞き　同
惡業をなすには金が乏し過ぎ　同
修養會便所掃除の籤をひき　大阪　田中風葉
巡禮が二人電車の隅へ立ち　同
役人の我身になつた冷やつこ　同
後備役戰術よりも釣上手　今治　長野文庫
捨てられたやうに合宿晝寐する　同

曉童上阪

今迄は寔に夜明け前なりき　同
義妹も繼母とは別な氣を使ひ　大阪　山本葉光
洋裁を習ひ自活もせずにゐる　同
髭剃らず逢ふ自惚れのたくましさ　同
日本の音で飛行機低く來る　朝鮮　弘津柳慶
旅に出てこゝに住みたい事ばかり　同
カメラと知つて日傘は横にそれ　同
日記帳夫のくせも書いて置き　大阪　森本秋子
寶塚ごうせ添はれぬふたり連れ　同
丸髷をうれしく見たも二十一　同
日常を戰さと想ふ日が續き　下關　東方司半休
英靈の誓ひはたした樣に着き　同
僕よりも痛かろ軍馬の傷を詫ぶ　朝鮮　姜弘龍
大人と呼ばれて見たい鬚になり　同
殘品に泣きたい程の月が出る　福岡　大西洋
自殺するやうなかつこでのぞをそり　同
何處までも女涙でゆくつもり　大阪　今西湖秋
もの一つねぎる度胸も世帶馴れ　同
西瓜食ふ子の健康に見惚れて居　廣島　近藤須彌浩
甲種合格失戀が何だ　同
燈管の街へ消せない月明り　同

北海道の旅より

長萬部そば半分で走り出し　大阪　九島利生

樺太小沼養狐場にて

銀狐ウサンくさいと穴へ逃げ　同
第二號子供の出來る願をかけ　奈良縣磯田町　嶋田翠峯
ノータイで工面に行けば斷られ　同
待つてゐるマイクロフォンが咳をする　尼崎　飯尾寄與史

夏山の雨

こう迄も落付かされた山の雨　同
暮れ切つて舊溫泉の灯が涼し　大阪　日出花津子
遺家族の人に交つた朝詣り　同
未亡人銃後の溫い風にふれ　下關　多田市多樓
貧乏は僕の試煉と負けてゐず　同
三度程市場を廻はりまだ買へず　名古屋　吉田文女
こうふ屋のラッパ時報のやうに來る　同
玉子だのリンゴだの新家庭のメモ　岡山　大森千代香
寢台車富士は歸へりに見るつもり　同
懸賞歌當選で志望あらたまり　長野縣上山田　佐二木千隈
七年忌住職までも忘れて居　同
大膽も一種の馬鹿と見てしまひ　大阪　津路紅多呂
商店法後は將棋の時間とし　同
自己嫌惡煙草の味の苦いこと　廣島　石原伯峯
惡夢のごとく女の體臭が迫るなり　同
郵便屋戀文だとは氣づくまい　廣島縣　田窪石鐵
愛染かつらの歌をうたはふ君と僕　同
白粉をくびだけにして三味をひき　堺　駒井昌坊
上かん屋何も忘れた人がゐる　大阪　吉田湊万
日の丸の今日は翼の使節行く　大阪　北野明美
今年で三人目といふ淵で水泳ぐ　下關　岩崎勇記
宿帳の親子刑事に恐れ入り　堺　野島近衛
秋風の情も知らぬビルの人　大牟田　高田抱逸
むかついて居る店員の眉と知り　大阪　富岡巨人
日本語も使ひ敵兵又夜襲　堺　野島茂治

第二補充兵

蔣介石俺を日本人にしてくれた　尼崎　江口正路
神前で誓う二人の進む道　大阪　竹内春坊
ニュース見てお茶で別れて都會の娘　兵庫縣　三宅君女
母親が娘の肩へ背延びする　堺　野島夢女
禁酒する夫の自肅淋しまれ　大阪　堀毛一龜
凉台醫者には聞かれたくない話　兵庫縣　増元甲陽
皆兵の一員なるぞ孤々の聲　尼崎　山田南濃路
電話室化粧の女嵩だかし　大阪　尾崎方正
母親が娘の肩へ背延びする　堺　野島神樂
冤罪を主人の爲に一と昔　堺　野島神樂
星空にまた戰線の子を思ひ　大阪　坂井楠水

て此處に勤めてゐたことだつた。思ひがけないこの再會に、話題は當然僕の知らない昔に遡る。

奇遇奇遇　女は母になつてゐる
白面人
子供への愛は　ネオンに負けず生き
同
（白面人記）

奇遇に昔話の花が咲いたため一列車遲れて、午後三時五十分の津山發大阪直通に乘る。姫路でクリームソーダ代りのアイスクリームと新聞を求める。車窓に黄昏が迫る。

つれづれ

吉田水車

私でよかつた——本誌八月號の後記に「沖へ行きなやお父さん」を見て思ひ出した。大阪に居る頃の或夏母が干物に上つた。もう大分朽ちた物干の階段の一つを踏み拔いてしたゝか向脛をすりむかれた、そして言はれたには「ア、私であつてよかつた」

名古屋に物干台無し——物干のついでにもう一つ、名古屋へ來て不思議なのは各家に物干が無いことだ。しかし絶無ではないが稀有な程である。大阪で二階家なら大方物干がある。大げさに言へば名古屋建築史上何かいはれがありそうだ。

日章旗——滯歐二十年を經て歸朝された私の社の重役の話に「折よく神風機を歐洲で迎へた。其國民衆の熱誠は大へんなもので歡迎に當りそう澤山の日章旗がある譯でない。そこで間に合はせの紙旗へ赤い日の丸を書いて間に合はせた其日の丸が外廓の割合に小さいのやまちまち乍らともかくも日の丸を染め出し手に手に雀躍と打ちふる姿を見て日本帝國の國威の有難さをしみじみ味ふた。國威宣揚のこの一挿話を聞いて何か胸迫るのを覺えるのは私ばかりではなからふ。

清水一家漬物となる——靜岡名産として最近「治郎長漬」がある。濱松へ來ると「森の石松漬」が出來た、こうして順に清水一家は漬物となるのであらふ。

時局を喰ふもの——英國人入るべからず、と各地旅館等で閉め出しを喰はすのはよいが純邦畫上映の某館で右の看板を業々しく出してゐた、これ等はむしろ營業政策的廣告としか受けとれない。

夕暮へ農夫きれいな色に見え　孤蓬

加古川を過ぎる頃から白面人氏と柳論を闘はしてゐるうち、いつの間にか神戸を過ぎて八時十五分大阪驛に着く。

英靈一體　今日も泰安室明し　孤蓬

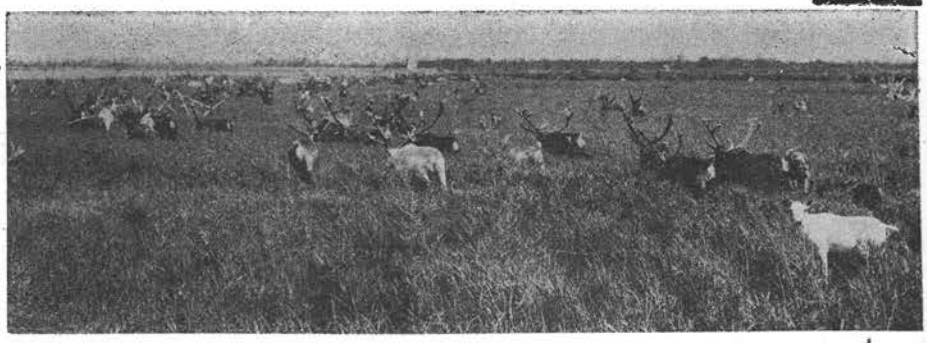
たつた三日の旅ながら重ねたお互ひの失敗や愉快だつたことどもを話し合ひながら、地下鐵で難波へ出て無事解散。

劇勸をきつちりすますネオンの灯　孤蓬

あくびして面白かつた云ひつぐけ　白面人
（孤蓬記）

雜筆

淺野李介・酒井斗風・安川久留美・岩本素人・石崎柳石・小山文三



（イカナトビラドンツ）

したもので無樹木地帶で、而してその地帶には水蘚に屬する微生植物が五十餘種程密生してゐるものである。故に表面層にはミヅゴケ屬の蘚類外矮小灌木、小草木が堆積、介在して、吸收すべき肥料がないから發育不良で、誠に盆栽的に優雅な形になつて點在し表面から突出してゐる。其の以外は所謂五十餘種の苔蘚で充滿して、お互に絡み合つて生育している。踏めば五六寸もずつと、めいり込むが、丁度藁でも踏む樣な感じであるこんな風に、せめあつて密生したものが積層をなして深さ四五寸から十餘尺に及んでゐる。これが即ちツンドラ（苔原）の實相である。

一度この野に立つてみる、とその廣さに愕かされる。尤も廣い所で五萬五千ヘクタール（一ヘクタールは一千メートル角）である。私はこの野に立つて何とも云ひ樣のない感じがした。今これを利用すべく研究もなつて踏査に來たが、聞いてゐたよりも、その無限の廣さ！　見渡すかぎり、足下から、自然に頭をあげて見渡す限り！

只ぽつとツンドラの野に
ひとり立つ

といふ感じで何物をも掴み得ない、否掴まれないのであつた。

馴鹿（トナカイ）なれ鹿といふのは日本語である。よく映畫でみる事があつた、鹿の如きロク柵のような角をもつた動物である。體の大さは內地の牛より少し小さい位色彩は二三ある。茶、白黑のブチ、黑等である。

放牧されてゐるものはこのツンドラ野ゐにる。飼料としてはツンドラ中のトナカイ草といふ青白い、內地の青ヂシヤの少し葉の少ない樣な苔を飼料としてゐる。これを特にトナカイ草と稱されてゐる、ツンドラ原野の表面層に矢張り他の水蘚類と共存してゐるもので、馴鹿はこれを、あさつては歩くのである。

北緯五十度の國境線迄には馴鹿の數五百位だといふ位に少ない。今某方面にては嚴冬季に於ける輸送機關の一つとして多產の方法を講究中とある。それは非常な耐寒動物で零下四十度の嚴寒時でも平氣で荷物を運んでくれる。普通の牛馬では迚も凍死して仕舞ふに、この馴鹿計りは悠々活歩する而も非常に輕快に出來てる足を持つてゐる。丁度二ッ割れの長い爪と、俗にいふヒ爪が非常に長いので、ふは〳〵した、ツンドラ原野を素早く歩いて行く。又性質は非常に優しく從順である。ズ體が大きいが一面又弱い動物で、犬なんかに、吠えられて疾走してゆくどうかすると犬に殺されるそうである。コンナ處はソ聯兵に似てるらしい。

土人はこの馴鹿を飼うて、冬季運輸に夏は放牧し、肉は食料に皮は自分等の衣服や防寒具に、その他種々の獵器に使つてゐるので、土人に對しての馴鹿は重要な動物である。

馴鹿のなれ來て
奈良を偲び見る

樺太にて

淺野李介

ツンドラと馴鹿（トナカイ）

ツンドラといふ言葉は日本國中誰れも聞く言葉で、樺太に產するものと、朧ろながらに覺へられてゐるが、さて、どんなものかといふに到つては、なんだか、解らない。兎に角廣漠な原野の氣がする名稱のやうな言葉として、腦裡にしかも淺薄に忘れられて、又覺へるといふ位な記憶しかないのが普通である。で今、柳壇人の知識慾として六ケ敷科學方面を避けて皆樣に御知らせしたいと思ふ。

ツンドラはトユンドラといふフインランド語（Tundra）から來たものだといふ、苔原を意味

佐々成政

酒井斗風

數年前のある秋の日に、尼崎の寺町を散歩して、法園寺と云ふ寺院の前を通りかゝると、門脇に佐々成政公墳墓之地とあるに氣付いたが、其の日は素通りしてしまつた。

それから後機會あるたびに、一度おとづれようと思ひながら其のまゝに成り、今日中馬病院からの歸途おとづれてみた。

私が佐々成政を懷しくおもふのは、彼れが、鄕里富山の前田侯以前の藩主だからである。

成政の事跡は、鄕里には何も傳はつておらず、どこで、どうして死んだのかそれも分らず、ただ二三の傳說があるだけなので、私が尼崎に住んで、はじめて知つた彼れの墳墓に、ぬかづいて不幸な英雄の末路をおもつてみた。

從四位少將佐々成政は、天文三年正月十五日尾張國春井郡比良の城に生れ、幼名は內藏助と云ひ織田信長に從ひ轉戰三十有三年、其の戰功により天正三年越中の國富山の城主となり信長死後は、義を重じて豊臣秀吉に從はず織田信雄に屬し、天正十三年八月、秀吉に攻められ和を講じて、天正十五年六月肥後國熊本の城主となり、やはりこゝでも秀吉の命をきかず、島津と手をにぎり、九州北部を平げ、

これが爲、秀吉懼をいだき書を以つて尼崎に招き天正十六年五月十四日自盡せしむ、行年五十三、法園寺に葬るとある。織田信長さへ最う少し生きて居れば、彼れも惠れてゐたであらうに。私が幼い時、聞かされてゐた傳說は、彼れが秀吉に攻められて、十一月下旬富山の城を落ちのび立山の彌陀原野を越へた時、持つて來た愛妾の黑髮を、この彌陀原野に捨て、信州松本へのがれ去つた。其のあとへ黑髮が變じて、あの美しい黑百合が咲くようになつたのだと云れてゐる。

最近文藝春秋七月號「花のとりどり」に、豊臣時代に北越の大名であつた佐々成政の寵妾に早百合と呼ばれた美女があつた。其の天稟の美貌は寵を一身にあつめて、數多の側女達の嫉妬を買つて居たが、いつしかそれらの讒に逢つて、終に成政の手討ちになつた。早百合はそのいまはの際に成政の無情を恨み、たゞ一言、立山に黑い百合の花が咲いたら、この佐々家は必ず滅びる。必ずや自分は立山に黑い百合の花を咲せて見せると低く叫んで呼吸が絕えた。其の後、成政は立山に咲いた黑百合の花を見出し、それとは知らず珍花として天正十六年大阪の秀吉に獻じた。さて其の時以來成政は淀君の寵を失ひ終に佐々家は滅びてしまつた。

尙、佐々成政の墳墓が金澤市內にあると私は聞いてゐるが尼崎の法園寺境內の墳墓をみると、金澤の方は、分骨か何にかを分けたのではないかとおもふ。

傳說を知らず
黑百合つんでゐる

昆布小岩

安川久留美

腐つた卵でない夕日
まつ赤になつて
沖の水平線へ沈む

×

一つしかない渚の小岩
波に見えつ、隱れたり
白く笑ふた波がしら
梳ける櫛にも見えたのは
昆布が蛋の髮のいろ

×

昆布の繁る八月は
蝦夷の海べがなつかしい

鶴見氏のユーモア觀

岩本素人

或る書物の中で鶴見祐輔氏がユーモアは文學において重要なる地位を占めると同じやうに、政治においても、頗る大切な役割をつとめてゐることが窺はれる。ユーモアのあつた政治家と無かつた政治家との間には、その生前は勿論、死後においても大層ちがひがあるやうに思はれる。

ユーモアを缺如するといふことは、少くともその人が人生の一方面について——全く無理解であると言ふ證左である。それは、單に人間味があるとか、情があるとか、言ふことゝは違ふ。もつと本質的な人間の性格に關係してゐる。

それではユーモアとは何か、と言はれても、自分は一寸返答に困る。心理學者から言へば、それ相當の說明があらうし、哲學者にも、文學者にも、皆一ト通りの說明はあらうけれども、何もさう八釜しく定義を下さなくてもよからうし、定義を下してしまつては、何の變哲もないことになつてしまふであらう。

ユーモアとはそれでは日本語で何と言ふのだ、と言はれてもまた困つてしまふ。滑稽と言へば下品になるし、可笑味と言へば、輕薄になるし、諧謔と言へば、理屈つぽくなる。これ等の文學は、各々封建時代に別な聯想を持つた文學と化して來たから、本當の心持が出てゐないのであらう。

と言つてユーモアの見本に小話が二三擧げてある。そして日本人とユーモアについて次のやうな意味の事が書いてある。

スコット君と言ふ西洋人が言ふには

「日本人はウキットに富んでゐることは、認めるが果してユーモアに富んでゐるか、どうか疑問だ」

などと言つた末、それではウキットとユーモアとの區別は一體なんだ、と言ふことになつて色々頭をひねつた揚句、同君が、

「ウキットは、地方的にして、ユーモアとは普遍的なり」と定義して、片がついた。つまりウキットはその國、またはその地方だけで、面白いので、他國語譯して見れば何の變哲もないが、ユーモアは、どこの言葉になほして見ても、おかしいものだ、と言ふのである。

「日本人の好む冗談は、多く我

々の所謂沙翁時代の冗談といふものだ。たとへば、人が穴の中へ辷り落ちた、それが可笑しいといつた風なものだ」

これは一紅毛人の談片として書かれてあるので、鶴見氏の意見ではないが、あまりにも、日本を知らな過ぎる。鶴見氏も亦「日本人はユーモアを解さない」と言ひ、ユーモアではアメリカ人と太刀打ちが出來ない。いや支那人にも及ばない。といふ風に言つてゐる。

鶴見氏は前に「ユーモアを缺如するといふことは、少くともその人が、人生の重要なる一方面について全く無理解である證左である」と言つて、日本人はユーモアについては、アメリカ人の足下にもよれない。支那人にも劣る。とは、とりもなほさず、日本人は人生の重要なる一方面について全く無理解な國民である。と言ふ事になる。之れが日本人の著書なんだ。

果して日本人は、ユーモアを解する事の出來ない民族であらうか。僕は斷然「否」と答へる。寧ろ日本人の方が歐米人よりも、深くユーモアを解し、そして感受性の鋭い所の國民であると私は信ずる。しかも西洋人のユーモアは甚だ淺薄であるに對し、日本人のそれは哲學的な深みを思はせる。西洋人は表情澤山で一見賑かであるが淺い。日本人は無表情であるが腹藝をやる。噛みしめて見ると底から底から面白味が湧いて來る。

それから、鶴見氏はユーモアの一例として次の樣な小咄を擧げてゐる。

ある處に、二人が議論をしてあすこに落ちてゐるのは、黑豆だ、いや黑い虫だ、と言つてゐるうちに、その黑いものが、ノソノソ匐ひ出した。すると一方が、それ見た事か、蟲ぢやないか、といふと、負けぬ氣の強い相手の方が「いや匐つても黑豆だ」と言つたと、言ふのである。

そして「此の『匐つても黑豆』のやうなのを、話しても日本人は千人のうち、二三人位しか笑はないであらうと思ふ」と言ふに到つては、あきれ返る。全く腹が立つ。

だが、私が今こんなにカンカンになるのは、ちと、腹の立遲れの感がある、と言ふのは、私が讀んだのは極最近の事だが、此書物の出たのは十年も前の事だ。その頃には、こんな國籍を取り違へた樣な書物を出して、本人も得々たり、又世間でもこんなものを無批判に歡迎したものだ。今の鶴見氏なら、まさかこんなものは書かないだらう——書いても賣れないが——何しろ日英會談を日本語で行かうと言ふ時代なんだからなア。

演藝・映畫に川柳を觀る

映畫 風流浮世床

於 阪急會館　水谷 鮎美

王將を取られ平氣な男也
泥棒の表へ廻ればかしや札
長屋皆特異な藝を持つてゐる
いゝ天氣觀音さまは知らぬ戀
車座のペテンにかゝるいゝ家主
古疵に惡人となるするどき眼
仇討の母娘へ長屋總出也
本懷に日本晴れの駕がゆれ

新協劇團を觀る

六月十五日　於 朝日會館　水谷 鮎美

神聖家族　五幕

新米を胴あげにして喜べる
新米の眼が手のように動くなり
少女らの罵る心猿に似る
醉うて戻れば母の背中がまるくあり
娘をおもふ老母の涙の手暗り
兄妹に言ひ負けて出る素直な子
英習に浴衣の妻をふりかへり
團扇から夫婦の風がやはらかい
爭ひのあとの握手に風があり
味噌汁のうまさに朝の汽笛鳴る
汽笛鳴る妻は夫を信じきり

子供と想

石崎 柳石

湯殿からふと窓外を仰げば月が出てゐる。夏の片破月が浮んでゐる。尋一の子供之を見て「あれミカヅキサマだね？」と問ふ。「うん」と答へると、すぐさま「あれ、ミ(身)が欠けてゐるからミカヅキと云ふのね」と來た。子供にもこんな語源說がある。

「お父うさん、どうして海の浪は陸に押寄せては引寄すか？」との質問。

「さあ、それは神樣がそのやうにお作り下さつたからよ」

「あれね、浪が陸の方だけに來ると海の眞中に水が無くなるだらう、さうすると汽船が通れなくなるからよ」かう云ふ知性の世界が子供にはある。

ラヂオのスウキッチを切ると何かの會の錄音、その中に「天皇陛下萬歲」の齊唱がある。聽いてゐた六歲の女兒「天皇陛下萬歲云ふて死ぬんじやろ」眼を輝かして云ふ。かう云ふ魂の世界が日本の子供にはある。

隨筆數題

小山 文三

蜘蛛の巢

養生しながら、ズッと我家に引籠る樣になつてからは、庭や門先や、家の廻りの蜘蛛の巢を捕る事が朝飯前の私の仕事の一つになつてしまつた。

家は小さいし、庭は至て狹いのだが、夫れでゐて、毎朝とつても、捕つても、一夜明けると必ず三つ、五つの蜘蛛の巢があつて、凡四、五ヶ月の長期抗戰も到底其絕滅を期し難い事を悟つた。まだ〳〵秋の終り頃迄之れを續けるつもりである。

蔣政權だつて、たとへ最早死にもの狂ひであつても、やはり生存の爲めには、其國運と私運を賭してゐるのだから、一年や二年で絕滅を期するは無理であらう。

況や支那は條虫の樣であつたり、サボテンの樣でもあつて、切つたり、取つたりしても其一分部だけでも、ねばり强く生存するのだから……

貧乏の花好き

路郎大人から「貧乏花好き、阿呆鳥好き」と言ふ諺を敎へられたのは、つい先日の事である。

なる程、桁外れの花好きであつた私の母は又一方で、何でも彼でも、人に呉れてやる事の好きな人だつたから、二年前に死んだ時にも、臍繰り財布は空つぽであつた。

此血を享けた荊妻も可なりの花好きで、やつぱり貧乏性には變りはない。

長男の鳥好きも有名で、小さい椽側で小鳥を飼つたり、猫の額の庭先に養鷄をやつたりして得たる鷄卵が一つ八錢から十錢にもつく等と笑つてゐたのである。これ亦阿呆の部類に相違なかつた。

畏友Y氏の息子さんは子供の頃から鷄飼ひが好きだつた。駒場の帝大農學部を出た其息子さんは、並み居る同窓の官吏となつたり、技師になつたりするのを尻目に掛けて、卒業匆々京阪沿線に土地を相して、養鷄生活に身も心も打込んだ。初めた頃には、Y氏の親戚、知友が「鷄飼ひ位なら、大學を出なくても……ネエ」なぞと冷笑したり嘲つたりしてゐたのであつた。それから數年、着々報ひられて今は關西、否日本に於ける模範養鷄場となつて、同窓の誰れ彼れから羨ましがられてゐるのである。

阿呆と偉人は、やつぱり紙一重の相異に過ぎないらしい。

紙の節約

人造纖維や、パルプ事業に携はつてゐた事のある私は、やがて、紙の不足を齎すものとの早合點の見透しから、凡二年も前から便箋、封筒なぞの節約を實行した。

人から貰つた普信の封筒は貯へて置いて裏返して貼り直して再用した、新聞の折込み廣告紙なぞは、差支へない先への手紙の用箋に再用したのである。今でも此用紙、封筒類の再用を續けてゐるが、私の家庭なぞでは中々之れが使ひ切れない位である。

二年も前から豫想した用箋類の不足が、今でも一般市場ではそんなに不足でもないらしいのに、まさかと思つた煙草の配給が圓滑でなかつたり、計らざる砂糖が不足しそうに傳へられたり、バターやチーズや味の素なぞが、出廻り薄になつたりして嗜好品食料品だのが一足先に不足しそうな形勢を見るのである。

靴の不足を見越して三、四足も買ひ込んだり、質に入れてまで洋服を買溜めてゐた男が、今では價格統制で、却て悲鳴を擧げてゐる有樣である。

凡そ淺墓な人間の見透しなんて、大ていは當て外れになるものである。

ス、フは弱くない。

ス、フは弱くて、直ぐ切れるから、首を縊つた男が、死にそこなつた等と、惡口を言ふ人がある。

木綿だつて細い糸なら切れ易い、麻だつて蚊張の生地では風呂敷には使へまい、絹の靴下は亞米利加で珍重されても、日本の田植娘の脚胖に使へば半日もたゝぬ内に破れるにきまつてゐる。合羽は紙でも雨は漏らない筈である」だから私はス、フだつて弱くないと言ひ度いのである。

要は何事も其使ひ方と、其本質の研究が大切である。

敢て國策の線に沿つて提灯をつける譯ではない……。

國報　保險
なか確てくき大
日本生命

川柳塔

‖路郎選‖

ひる遊ぶ部屋を出て行く蝶一つ　　岩崎柳路（張家口）

ナポレオンの様に彼奴の禿つぷり
股ずれの女房に太い腰の線　　寺井鋭々（兵庫縣）

黒い瞳が半分日傘から睨み
女抜け道あり生理作用といふ
夕刊を車中讀切る距離に住み
通勤の足がバラスを踏み馴らし
ヨット走る紺青の水ある限り
海に來て海に入らぬ細い肩
富士の外は見ゆるものなし馬子と立つ
一家族移住のやうに避暑をする
避暑ひとりある日杉の樹見て暮らし
老杉を見てゐれば僧に似る心
信念が古洋服を恥とせず
煽風機叱られてる方へも廻り
日給となる辨當を提げて行く
食堂裏西瓜の皮に犬呆れ　　大阪　大西八歩

白き花ほのかに旅愁せまりくる
遠雷聞いて下りる木鍬
群衆の中にかほそき我が姿
のれんの奥に光る近眼
身づくろふせむしの春をさみしがり

絶對絶命ですものと女涙ぐみ
饒舌の女へ淋し新佛
子の顔の俺に似てくる恐ろしさ
我が心他人の顔にふと感じ
兩三日、佛心になつてゐる
パーマネントその年甲斐をさけすまれ　　大阪　橋本綠雨

地下鐵は蟻を眞似てるやうなもの
軍犬になりますのやと旗を立て
貧しさにも空の星だけ變りなし
風鈴も今夜は風がないらしい
高原へビールをかつぐ元氣さよ　　白濱にて

浴槽からも釣竿を出してゐる　　大阪　高橋かほる

帶が殖え着物が殖えて二十一
鈴蘭燈續いて長い橋があり
長屋からすつと出て來て筆を買ひ
靴みがき夕立に戸を立てた樣
花生て夏の二階の美しく　　大阪　奥村丹路

妾の子また美しい生れつき
妾宅は東京にあり一等車
こんな人がと思ふ初戀
大成に到らず銀の腕時計
秋・あき・アキ久しく僕は待つてゐた
秋すでに庭の隅なるガラス屑
風をあぐ少年の瞳をよしと見て
塀の穴こゝはたのしき幼稚園
怪物の眼に似てビルの灯が一つ
鉛筆を削る役目をかしこまり
綿のやうな雲の下にて子を抱き
子を抱きしめてこの哀しみは何ぞ
GOLDENBATの魅力君知るや
母の無慾のほゝきものかな
川風のほのかに匂ふなかに泣き

秋の蚊のよわ〳〵しさを思ひゐる
秋くれば逢ひたき人のひとりふたり
キリギリス秋を待つてたやうに死に
少女ふとバカバカとバカバカと言うてみる
孝行をせよとは母の言はずして
身のほゝを知れは淋しい獨り言

○

千人針男さびしく通りぬけ　　名古屋　吉田水車

フジヤマを三度越したり盟邦機
制服を着れば部長のいかめしき　　大阪　妹尾八九滿

上役も下役もなし長期戰
滿員に車掌の聲を遠くきく
行水へ西瓜のタネのついた足
放し飼ひ、ヒヨコを叱り子を叱り　　大阪　須崎豆秋

反英のデモに松葉杖もゐる
有田さんへヒツトを賴むのは無理か
アルバムにいとこ、はとこの鐵兜
扇風機碁の先生へ向いたまゝ
冷房の窓からお巡りさんが見え　　南支　宮岡白峯

彈の中妻子の寫眞すてゝ征き
彈の中千人針をしめて立ち
熱帶植物背にあり彈の中を征く
衛生兵彈の中にも止る用
慰問品やがては返す氣で貰ひ
武器被服俺は宜傳ビラをまき
姑娘の顔も見えたり双眼鏡
喜んでゐたが眞夏の夢なりし　　大阪　正本水客

あじさいが咲いて名譽の家の夏
あんまりな事を聞いてる竹箒
ぜんざいの塩が利いてる宵祭
夏暑きものに歪んだハイヒール

鉛筆でくる請求書あなどれず
奇策從横今日は帽子を冠つてゐる
今度目は死ぬぞと悪友見舞ひにき
外交官型とは、およそ詰らなし
窓許り向いて女の一人旅
コスモスへ散る齒磨粉眞白し
誘蛾燈夜汽車の音も疲れてる

豊中　黒川紫香

百姓の一日座敷から見られ
蚊とんぼへ新聞まいて身構へる
小半時やつぱり墓はそこに居り
小兒科で婦人雜誌はよくよごれ
道訪へば名譽の家の札がありこれつきりない金母はまた與へ

大阪府　丸尾潮花

クリームだサイダーだ宵の山樂し
茶の間から見える朝顔二つ咲き
雨少し晴れて草拔く畑へ出る
七夕の笹へ子と居る久し振り
夕立をひと時耐ゆる孔雀草
茶の間から見る山肌に霧が湧き
愛人の襟が綺麗な夏の宵
登山バス眞夏の戀を乘せて搖れ
鈴蘭の花を封じた便りが來

大阪　岡田某人

動かざること山の如く利子も拂はない
思たことはズバ〳〵云へと雲の峰
會計は留守です二流新聞社
あゝ拔毛ゆふべの酒を悔ひよとか
この窓も秋なり簾外される
名をきいて女給にシヤープ借りられる
ノーバイブルージュは戀を待つ色か
莫迦見せ合ふて酒に悔ひなし
呼び出しへテキはお風呂に居ると云ふ
人を戀ふひる寢の枕むねにあり
客絶えてプールに秋の雲一つ
喰べて降りる重さとエレベーター知るや
同名の男が掏摸で捕まつた

兵庫縣　田邊由布

にんげんのねがひ已さん聞てゐる
大阪の埃百圓札とゐる
全盛といふ家うめよふやせよと
マタイ傳五章にんげん血を拔かれ
あをじろくラブイズベストひとり者
軍需景氣あの娘この娘のス・フきれい

尼崎　酒井斗風

彌陀如來僕と子供の手が溫し
ルンペンに長屋の人情わかるまい

金策にふれず老父からバスもらう
父に洟ふかせて夏をよく遊び
病弱へくだもの籠がとゞく朝
療養の二階でひとり佛書よむ
貧しさをわすれ火星をみてゐたり
テロリスト會へばさびしき表情よ
熱帶魚次男三男だけのひる
うらほんへ足を落したきりぎりす
ニッポンと書く子へ濱はやけてゐる

兵庫縣　水谷鮎美

屋上の裸へ煤が黑くおち
暑中御見舞頭のひくい人となり
待ち人へ月があがつてくる餘裕
無帽主義君もよつぽどいけるくち
唇がかはいた凡夫の眞晝
障子の破れそこが人生の穴でした
本にきた蚊ににんげんをとりもどし
子や妻や母といつしよの陽をあびる
行水のそれからへちまの下にゐる
クレオンの繪が畫けてくる夕まぐれ

京阪丸にて琵琶湖島めぐり（八月廿三日）

父として双眼鏡をとり直し
湖の果は白帆の霞むとこ
水あとの一すぢ白ろき今日の旅

募集句　一路集

洋書　文庫選

投句には「虚榮、體裁、裝飾用としての洋書の句」が一等多かつたが、さて拔いて見ると「讀んだ洋書、讀む洋書の句」の方が佳かつた。極く大雜把に分けて見る。

實用的に見た洋書

スパイめく樣に洋書を讀んで居り　市多樓
熱帶魚洋書の影がゆれて居る　水客
夏休み洋書に少し塵もあり　紅多呂
高校で戀の洋書は締め出され　異天樓
老博士昔の洋書土用干　彌生
曇つた眼鏡拭きつゝ洋書讀み續け　水虹
製本屋洋書の値段聞かされる　春巣
スラ〳〵と洋書が讀めるタイピスト　抱逸
洋書繰つて色んな意見主張する　曉童
秀才の洋書手垢のあとがあり　久枝
博士號夢に洋書の頁繰る　みづほ
繪が描いてあつて洋書の意が分り　葉光
洋書讀む女の眼鏡度がきつい　同
汽車が着き洋書を閉ぢる宣教師　青風
外交官めざして洋書讀み耽り　同
洋書かゝえて獨身主義に落ちた娘よ　南濃路
洋書パラ〳〵女博士の涼しい眼　同
洋書買ふ金を嫁いだ姉が呉れ　斗風
更生を誓ひ洋書を燒き捨てる　同

裝飾用と見た洋書

淨瑠璃の本は洋書と別な棚　不水
車中にてこれ見よがしの洋書なり　松壽
外人が居るので洋書が開かれず　白雨
裝飾にされて洋書の金が褪せ　葉光
應接室讀めぬ洋書も棚に在り　一龜
初めから飾るつもりで洋書買ひ　ぎん
喫茶店へ讀めぬ洋書を持參する　曉童
轉宅へ洋書荷になり邪魔になり　照波
應接間洋書博士を信じさせ　神樂

その他

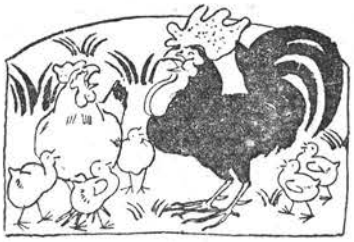
丸善は一ぺん讀んだ顔で賣り　水虹
排英の中に洋書は賣れてゆき　異天樓
忠孝の二字を忘れて居る洋書　抱逸
洋書から空巣狙ひに足がつき　春巣
古本屋洋書案外安いなり　青風

感吟

洋書など見ずにこゝまで築きあげ　松壽

軸吟

洋書屋は爲替がどうのこうの云ひ



武玉川三編研究

（三三）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(635) **こらへ兼ては清水へ行**

秋の屋＝清水寺の舞台から、傘を差して飛ぶ迄に立到つたので、恐らくは切なる戀であらう。

東魚＝前説に賛。

省二＝清水寺の管長が拙家に泊られた事がある。私は病中で會はなかつたが、舞台と傘の一件は、寺の方に何にか興味ある話説でもありはせぬか、未だ尋ねてはみぬが。

(636) **男ひてりの中に長刀**

省二＝男にまさる女武者

秋の屋＝淨瑠璃「の伽羅先代萩」の御殿の場とでもいふ所である。

東魚＝男ひでり間、男に接せぬ間に、長刀の稽古を積むといふ意。「中に」は「うちに」であらう。つまり處女の間にの意味と考へる。

(637) **鷄買ふて夜も見に行**

省二＝心掛りになるから。（始めのうちは）

秋の屋＝この鷄を、鶯に換へたらは如何であらう。

東魚＝狐や鮑に襲はれでもしたら可愛相であるし、元も子も失ふから夜も見廻はる。

(638) **剃刀の刄へひける光陰**

秋の屋＝「刄へひける」が不明であるが、剃刀を研ぐ毎に刄が減つて、遂に廢物となる如く、光陰もまた速く過ぎ去るとでも云ふの歟。

東魚＝過ぎ行く光陰の早さへ、鋭い剃刀の刄を思ひ合はした處が、何となしに説明なしに、一種味ひがあるやうに思はれる。説明すれば矢張り前説の如くにでも云ひ表はすより致し方がなからう。

省二＝お説の通りならむ。むつかしい表現だ。「ひける」は消えるの意か。

(639) **尾花かもとへ通ふ仲人**

秋の屋＝草深い郊外に隱れ住む、浪人の宅などに通つて、縁談を整へる仲人である。

東魚＝賛。但前句關係によつては、狐を連想してもよささうにも思ふ。

省二＝此句も亦むつかしい表現だ。

(640) **降る雪の明り程なるとうからし**

省二＝降る雪の中に、明り程に唐辛子が見ゆる。（俳諧では唐辛子は秋季であるが、これは保存されてゐたのであらう。）

秋の屋＝大方農家の軒先などに、蕃椒を束にして干してあつたのであらう。

東魚＝貧弱な灯火を「唐辛子程な」と云ふ。であるから、雪明り程の、明るさにみえる唐辛子と云ふだけで、別に雪の降つてる場合ではなからう。

(641) **秤に輕き水の本望**

省二＝茶の湯用の水。

秋の屋＝宇治の三つ間の水でゝもある歟。

東魚＝清冽な水が、其處を得たる本望といふわけ。

(642) **口留をする精進も有り**

東魚＝何か秘密な仔細があつて精進をする。世間へ知られたくない事なので、事實を知つてゐる者の、口留めをする場合。

省二＝口留をして置きたい精進は、想像すれば色々ある。人生も複雜なもの。

秋の屋＝先妻の祥月命日に當るから、窃に精進をするので、今の女房には内緒だ、とでも云ふのであらう。

(643) **まだ夜は縞を羽折て桑門**

東魚＝浮世はなれた生涯に入つたが、夜のうそ寒い時は、尚俗の時分の縞の羽織、世捨人らしからぬものを羽折る。

秋の屋＝「まだ」の二字に據つて、全然脱俗せぬ出家といふことが知れる。

省二＝桑門（よすてびと）のなりたてか。

(644) **狐にほれる若草の中**

省二＝美人狐に化されかけたのであらう。

東魚＝陽炎の立つやうな若草の野に思ひもかけぬ美女を見かけて、餘り美しいので狐かも知れないぞと云ふ輕い心持ち。

秋の屋＝狐かも知れないと疑團を抱くのではなく、狐の化けた女と斷定したのである。

東魚＝狐だと確に分つては、惚れが不自然だと思ふ。

秋の屋＝眞に惚れたのではなく、その美しい姿に惚れ〳〵すると解したら如何であらう。

(645) **寢かして置ていなのさゝ原**

東魚＝「いな」は猪名で「ゐな」の方が正しいのであらう。こゝの「いなのさゝ原」は「去なん」にかけてゐるのかと考へる。「さゝ原」は別に意はないので、「寢かして置いて退去する」といふだけであらう。

秋の屋＝「いな」の猪名であることは、前説の如くであるけれ共、此のいなは人の言語を否定する「否」で、異性から挑まれたのを、酒などを飲ませて、寢こかしにするといふの歟と想ふ。

省二＝「有馬山ゐなの笹原」で猪名だ。私も寢こがしにして置く丈けと解して居るのだが、まだ物足らぬ氣はする。

(646) **脊引大きな慾はなかりけり**

省二＝四手網で採る位で、大した慾望はない。

東魚＝別に榮達を望むなどと云ふのではない。のんびりと其日を送つてゐる境涯である。

秋の屋＝賛成

省二＝論語に子釣而不網とあるが、脊位はよからう。太公望の如く周の天下を釣つた者に比すれば、呵々。

不騫不崩之部

(647) **初て雨にぬれるつり鐘**

省二＝鐘樓が竣工されぬ中に、釣鐘が初めて雨に濡れたので、ある種の感じがわく。

東魚＝鑄上つて寺へ運ばれる。偶々雨が降つて新しい鐘がぬれたと云ふ處を興じたのであらう。

秋の屋＝少し平凡に過るやうであるが、全く捨てる程の句でもない。

(648) **麻上下の世話も寒だけ**

東魚＝禮式として麻上下を着ける、その着付けの世話も寒だけに、殊更冷え〳〵と感じる。

秋の屋＝此の上下は自分のか他人のか、世話をする意が明瞭でない。

省二＝「寒だけ」の意が未だのみ込めぬ。

秋の屋＝句の表から考へると、寒が明けて春になると、麻上下の世話が無くなる、とも解釋される。

(649) **側のものの見る手枕の夢**

省二＝手枕即ち、うたゝねだから、夢も身近なものを。

東魚＝ふと何げなく見た側のものを、う

たゝねの夢に見たので、事實にもある事だと思ふ。

秋の屋＝興味索然たる句だと思ふ。

(650) **七小町氣樂な時もなかりけり**

省　二＝七小町（草子洗、鸚鵡、通、關寺卒塔婆、山本、淸水）謠曲をみても判る通り乞食婆さんになつたり、仲々氣樂な時はない小町に生れるのもよし、わるし。

東　魚＝諧謔的な輕い可笑味が感ぜられる。

秋の屋＝美人多薄命といふ古語を現實したのは、小野小町であるが、謠曲の七小町は、作意が少し多過ると思はれる。

(651) **並んで飛べは憎い人魂**

省　二＝心中は可愛さうだけれど、その人魂が列んで飛ぶのは、何んだか妙な氣がする。

東　魚＝この憎いは本當に憎む心持ちでなく、寧しろ喜んでやる意味合、心にくゝ思はれる事の方と思ふ。

秋の屋＝贊成。

(652) **帆をかけて來る京の分別**

東　魚＝船に帆といふ便利なものゝある如く、都の人の分別の程は恐入つたものだ、とでも云ふのか。

省　二＝「帆をかけてくる」は、早い意味になりはせぬか。（さういふ心覺えがあるが）。流石京の人だけに、分別はまこ〳〵してゐない。

秋の屋＝尻に帆を掛けて走るといふ事はあれども、單に迅速なる事を、帆を掛るとは云はぬ。

(653) **喰ふ雪の降る蒸籠の上**

省　二＝蒸籠上の雪なら綺麗だ。例へば餅搗の折など。

東　魚＝門口に積んだまゝに置いた蒸籠に雪がふり積んだのを、若い者などが早速口へ入れる。蒸籠はまだ煙をあげないうちの光景。

秋の屋＝餅搗とは限るまい。江戸時代の菓子屋では、店頭に蒸籠を出して置いたのである。

(654) **座當つくねて仕廻ふ横雲**

東　魚＝横雲は夜明け方の意味かと思ふ。日待にでも呼ばれて、三味線の興など添へた座頭が徹夜で騷いだが、明け方近く何處かへもぐり込んで姿がみえぬといふ樣な場合かと想像する。

秋の屋＝「座當」は座頭の當字であるが、三味線よりも琵琶を彈くのではない歟。

省　二＝横雲は夜明けに東天に横ふ雲だからお說の如し。座頭に對し、つくねるは面白い形容。

(655) **細工か出來て唇を嚙む**

東　魚＝細工事が出來るので、細工に熱中する時の癖として、唇を嚙む。

秋の屋＝口を横に曲る癖の工人もある。

省　二＝なくて七癖。細工をする人などには一寸した癖はあり勝ち。

(656) **牛馬に喰立らるゝ八庄司**

東　魚＝澤山の牛馬を使役するので、其糧食計りでも大したものだと云ふので、「喰立てられる」と云つて逆に、八庄司の豪華さを現はしたのであらう。

秋の屋＝「八庄司」は、熊野山中の豪族八家のことで、「太平記」卷第五に、「欲心强盛の八庄司共」とあつて、芋瀨庄司、玉置庄司等の名が見えてゐる。

東　魚＝再考。八庄司は鹿瀨、蕪坂、湯淺阿瀨川、小原、芋瀨、中津、吉野十八鄕の者。とあるから山間の地で、隨つて多く牛馬を使役するであらうし、豊かな土地でないのだから、牛馬の糧食だけにしてが大變だと云ふ意味であらう。

省　二＝八庄司二說ある。一つは東魚氏の分、大和吉野の八鄕。秋翁の分は紀伊熊野で玉置、湯淺、秋津、芋瀨、眞砂、山本、日出湯川の稱。其莊を司らしむ者の稱。喰ひ立てられるのだから、牛馬が澤山ゐた事は判る。

秋の屋＝私が八庄司を前に熊野の豪族としたのは誤謬で、吉野より熊野へ往く衢に當る十津川附近の豪族と訂正する。

(657) **兜巾押へて舟へ飛込**

省　二＝紐で結むではあるが、舟へ急き乘込むのだから押さへて。

東　魚＝遲ればせに乘る渡船であらう。

秋の屋＝異議無し。

(658) **一晩は扇のしめる音頭とり**

東　魚＝夜を徹して盆踊の音頭をとつたので、夜露に扇子がぬれたのであらう。

秋の屋＝昔の浮世繪などに能く見る圖。

省　二＝音頭取の活動振りを察し得。

(659) **高座へ立た女見たかる**

東　魚＝談義僧の高座へ、何かと世話にたち廻る後家さんを、何處の後家だなどと見たがると云ふのかと思ふ。

秋の屋＝女自身が高座に上つた、とも解釋されるが、句意は判明しない。

省　二＝句面丈けでは女が高座に立つた事のやうに思ふ。

(660) **よい事はさせぬ西日のひかし山**

省　二＝東山とは祇園などを指す。夕暮からの遊び場所だ。

東　魚＝前說の如くであらう。東山から麓へ下れば、そろ〳〵祇園の紅燈が目に入る時刻である。

秋の屋＝東山に西日と云つたのが、この句の山であらう。

武玉川八月號正誤表

			誤	正
十	頁	段	行	
〃	一	壹	廿八	義之
〃	四	貳	一	義之
	五		無跡	義
			垂	義

あらゆる趣味のお稽古場
松坂倶樂部
手ほどきから奥義まで
氣輕く、樂しく、御上達
會員募集
川柳講座
川柳雜誌主幹
麻生路郎先生
擔當
お稽古目
長常清小鳴
磐唄元津物
箏尺舞謠能
樂小曲八曲踊鼓
ピアノ聲書日茶
樂道道本
華料洋俳川
道理句裁柳
氣棋松坂レコード吹込所
學道
はみ込申御
七階松坂倶樂部へ
電話（表代）戎三〇〇三番
松坂屋
大阪　日本橋

同舟近詠

邸内で令嬢自轉車の稽古
軍服を脱げば白絣に袴
メガホンへお尻の砂を拂ひつゝ
いゝ役者道具方をもさげすまず
カタログへスフとも何とも書いてなし

朝鮮 池田可宵

歸還兵夢の夜襲へがばと立ち
セバートのおかげ先きから道をあけ
子を抱けば昔抱かれた唄になり
拗て居る姿フエルトは裏を見せ
内閣はごう變らうと儲からず
一人旅とろけるやうなことがなし
應召の子を持つ老をいたわられ

兵庫縣御影町 長崎柳秀

ショート投球一壘の手は長し
大げさにデットボールは跛ひき
2對3傳令の飛ぶむつかしさ
中繼のタッチ、アウトは繰り返す

甲子園野球風景 大阪 笠原路生

防警團に勤めて
萬燈を覆ひ、闇を守りの一兵卒
出動の命待つ列へ晝の虫
人造の闇を嘲り飛機狂ふ

大連 佐々木三福

もう先が見えて來ました保險金
犬の病氣に豫算越えてる
警報の下タ飯を長びかせ
定期券女の年が覗かれる
風雲に乘じる運のありはあり

廣島 濱田久米雄

遊ぶとこ兵隊さんにたづねられ
つんとした方の妓はサイダーのみ
時間給水戰地慰問の端に書き
晝寢なら君堂々と遣り給へ

松江 勝谷山川兒

それでよし勝つた便のそれでよし
長女次女三女借金嵩む筈
膳のない生活三十年あまり
草眠り木眠り君と僕が冴え
年不惑女房の愚痴に母の愚痴
眉引いて鼻の形を諦める
一日の汗は一本きりでよし
午前二時遊ばす人に遊ぶ人
分別はよせと拾弗札叫ぶ
古手紙こんな時分が花だつた

北支白石紫微花へ

ハワイ 高澤一浪

賣られ行く娘と西瓜同じ汽車
二二が四の境地に戀をあまんぜず
男甲斐今宵も嘘をついて出る

大阪 波邊曉童

日盛りを來た鳥の仲買ひ
だまつて歩るくきびしきあつさ
濕團扇で煽いでやつて強意見
米屋さんに惜しまれてゐる御榮轉
ふるきたらいにあとゝりむすこ生れけり
陣痛に待つあけの明星
完膚なきまでにあわてる父性愛
呱々の聲時計見る間はなかりけり
歡びの家が早くも水をうち
上阪の滿身創痍にはあらず

柳界展望

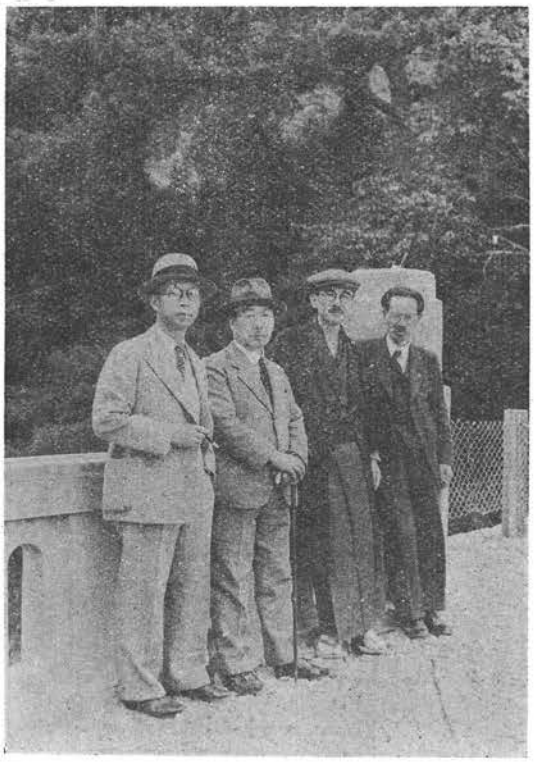
全國川柳界のこと各地川柳人の一聚手一投足を此展望欄ですぐわかる樣にしたい皆樣の御通信を歡迎する（編）

催

▼川柳雜誌社は八月二日午後七時から誓得寺で例會開催▼十日二十四日午後六時有恒川柳會▼六日、二十日午後一時松坂倶樂部麻生路郎川柳講座▼十九日夜、阪田オフイス川柳會▼二十五日午後四時阪大川柳會いづれも路郎主幹出席。▼小川靜觀堂君（張家口）進級祝賀の會が七月二十六日開催された。▼みちのく吟社は八月十二日小山内柳太呂君の入營祝賀會を催された。▼愛媛川柳社（愛媛）は初秋川柳會を八月十七日夜耕一路居にて開催

消息

▼毛利稔幸君（大阪）は既報の如く川柳人最初の徴膺令を受けられ○月○日路郎、紫香、潮花、風華、水谷、曉童の諸君に見送られ勇躍壯途に上られた。▼阿萬萬的君（大阪）富士登山して「あゝにくや雪が富嶽の峯へ來る」の句を寄せられた。▼宮内耕朗君（愛媛）は病後臺灣



有恒川柳會雨月慰問吟行（馬有）

先著し郎路たし月雨●可支●鋭々の諸君（五月七日）

川雜・案内

大賢活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢（但し前金切手代用可）改號、移轉、句會案内柳書廣告、その他

しなの 川柳
一部拾五錢 一年一圓八十錢
松本市大名町 しなの川柳社

京 東海の代表誌
一部十錢 一年一圓
京都市西木屋町四條下ル 発行所 京都川柳社

川柳草薙
一部一〇錢 一年一圓（郵税共）
名古屋市南區八熊町寺田 発行所 草薙川柳社

川柳きやり
菊判母號六十數頁
毎月一日發行 一部廿五錢
東京豊島區高田本町二ノ一四六八 川柳きやり吟社

伊豫 川柳
一部拾錢 一年一圓廿錢
松山市南柳井町五九 愛媛川柳社

みちのく 月刊 川柳
一部十五錢 一年一圓五十錢
青森縣黑石町 川柳みちのく社

蒙疆支部主催靜觀堂氏進級榮轉送別句會（前列向つて右より）

神戸鳳凰・八川四絃・小大川佐（靜觀堂）君・柳路・左藤少尉（秋麥）（後列）寺尾人史・代松寺君・鈴木默人・池上清水・字水桃敷の水君諸

を引揚げ郷里松山市外で靜養されてゐる。

▼戸倉普天君（兵庫縣）は病弱激務に堪えずとの理由で現職を辭し滿洲から歸國された今後川柳に精進される由。

▼米澤曉明君（愛媛縣）は八月十六日阿蘇山頂を極められ「噴煙の峯へ人間小さすぎ」の句を寄せられた。

▼長野文庫君（今治）は八月十六日石槌山へ登山された「石槌の山の靈氣に只祈り」

▼尾崎綠柳君（岡山）は岡山日赤病院で戰傷を養つて居られるが歩行全然不能といふ容體の中から投句されてゐる。一日も早く御快癒をお祈りする。

▼弘津柳慶君（朝鮮）は七月二十三日より十日間山口縣へ旅行をされた由、なほ同君から朝鮮地方は三十年來の大旱魃のため有名な朝鮮漬も喰べられないとの報を寄せられた。

▼平岩司郎君（京都）は〇月〇日應召入隊された。

▼裏家月麻呂君（大阪）は〇月〇日應召された。

▼下村四呂平君（大阪）は裏家君の應召を記念するため月麻呂句集を編纂された。近ごろうれしい友情である。

▼廣鐵の志賀寧男君は山口驛長に榮轉され九月一日廣鐵倶樂部で川雜廣島支部の送別句會が開催された。

慶弔

▼渡邊曉童君（今治）の令閨モモ子さんは八月十三日、長男一郎君を儲けられた。

▼植山九天君（上海）の嚴父が八月廿九日に郷里大分縣で永眠された。九天君は廿七日に飛行機で歸國最後の孝養をつくされた。謹んで悼む。

▼後藤青兒君（大阪）の令弟後藤中尉が壯烈な戰死をされた。謹んで悼む。

▼庄萬よし君（大阪）の母堂が八月四日七十六歳の高齡で永眠された。合掌。

▼山川一生君（大阪）の母堂が永眠された。謹悼。

轉居

▼岸本水府君は大阪市住吉區濱口東二丁目へ、同時に番傘川柳社も同所へ▼川柳大陸社は大連市仲町九へ▼西田當百君は大阪市西區靱中通三丁目八深見伊三郎方へ

▼北夢之助君は樺太大泊町本町西一、南二へ

▼關本雅幽君は大阪市南區高津五番丁三八

改號

▼森田三錢君は清見松夢

▼芝田靈之君は靈子と舊號に

懸賞川柳

課題「紐」十月十日
「飛ぶ」十一月十日
用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）選者麻生路郎氏
宛先　堺市出島町三五一番地
麻生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

正誤

前號二頁二段三行目の「出家かと」は「家出かと」の誤、六頁下段一行目「川柳人義」は「川柳仁義」の誤、七頁一段目三十七行目「古寺」は「古寺」の誤

★社告

▼**渡邊曉童君入社**　八月十六日から本社に勤務され營業部を擔當される事となつた。

▼**嘉義支部（台灣）解消**　幹事宮內耕朗君郷國伊豫に歸られると共に支部を解消することとした（八月。）

▼**上海支部（中華）新設**　植山九天君の骨折りで上海中心に支部を開く事にした。幹事は同君。

▼左記の諸君から「編輯をよりよくする費用」として金一封を寄せられた。謹んで拜謝。

米本貴志子殿　奥村丹路殿
松坂倶樂部川柳講座會員一同殿

▼**本誌選者推薦**　十四年間本誌に句を寄せられ不斷の努力を續けられた高峰柳兒君（長野縣須坂町）を本誌選者に推薦した。（八月。）

川・協

▼小林不浪人君（青森）は弘前放送局から八月十六日「張り切る銃後の女性」を放送された。

▼森東魚君（新居濱市）廿九日來社。

▼川協名譽會員川上三太郎君（東京）は九月中旬、天津、北京奉天、撫順、新京、哈爾濱、大連の順序で視察旅行をされる由

▼矢野虻の麿君（松山）は九月一日、大洲町の花房南葉君同伴來社された。

▼川協理事福田山雨樓君（東京）は鐵道省監察官附に榮轉され勳八等に叙せられた由。

▼月原宵明君（北支）からの消息が暫らく絶えてゐたが同君は南下轉進して山西省境山岳地帶で討伐されてゐたとの事だつた。

▼宮岡白峯君（南支）から廣東市內も日本式に發展してゐるし、日英會談のポスターなどもあるとのたよりに接した。

▼川協名譽會員塚越正光君（台北）は八月廿一日から東部台灣の工業都市及蕃地視察の途に上られる由。

▼酒井美知夫君（南支）「只今〇〇の第一線の最前線に頑張つて居ります。何時でも來れと、夜に日にかなり不自由な苦しい生活ですが又味はへぬ面白味もあります」云々。▼河野夜王君（大阪）が眼を病んで雜誌編輯に携はれないので「蟷螂」は七月號を休刊號とした。

▼生方敏郎君（東京）の「平家と源氏」がいよ〳〵刊行された。東京市世田谷區松原町二丁目七六五番地古人今人社へ申込まれたい。（定價四圓）

川柳大陸
一部　二十六錢　一ケ年　三圓
大連市仲町九
川柳大陸社

春聯
一部　二十錢　一年　二圓税共
大連市蘆廟町一六一森崎方
春聯川柳社

柳友
一部拾五錢　一年一圓八十錢
東京市杉並區和泉町八四
柳友會發行所

花地物壇

いのちある句を創れ

投稿規清

▼用紙は原稿用紙又は投句箋の事
▼文字を正確明瞭に記載のこと
▼開催月日及場所記入のこと
▼締切は毎月廿五日とす
▼投稿先は本社宛

路郎・豆秋整理

本社八月例會（大阪）

八月二日　於　誓得寺

本社八月例會は二日夕刻誓得寺に於て開催開け放つた縁側へ出でゝ、涼をとりつゝの作句も夏向きの句會らしい。凡太君沐天君の出席も珍らしい。柳話として、かほる、里十九の兩君が生え抜きの大阪籍で、千日前の昔を紹介され拍手喝采。次いで路郎主幹の前月句會入選句概評があつた。兼題席題入選句の秀逸には路郎主幹染筆の團扇を贈つた。（幹事）

出席者（順不同）

路郎・かほる・孤蓬・鮎美・富士・斗風・白面人・滿潮・綠雨・おさむ・風葉・豆秋・凡太・紫香・潮花・沐天・八九滿・默平・白柳子・小松園・紅多呂・村句茂・亜鈍・銃人・聰夢・萬的・幸路・春巣・里十九・某人・葭乃・一歩

席題「借　物」　互　選

布小旗借りて常着で送つて來　万的
借物の羽織に一寸呑まれてる　富士
借物で行く娘のあかき頬紅よ　鮎美
借物が似合へば背中なぐられる　白面人
借ものと思えぬ晴着に灯が明い　光路
奥さんにひろげてもろて傘を借り　滿潮
借物と言はず手荒く使はれる　綠雨
生年も月日も覺え定期借る　孤蓬
賞められてつい借物と云ひそびれ　斗風
借物のセルで男を待つてゐる　白面人
よく似合ふ借着はみなに急かさる　滿潮
兵隊を送る羽織を借つて來る　潮花
借りて來た本はきちんとしまひ込み　風葉
借物であるのを近所聞きたがり　村句茂
借物ですませる妻の智慧を借り　默平
袖口を氣にし借物かしこまり　紅多呂
借物のきずを見付けた妻の聲　おさむ
蓄音器借りたが針が錆びてゐる　村句茂
借物をたゝんで歸る雨となり　八九滿
全快をして借物を返しに來　紫香
借物を抱へる肩を叩かれる　滿潮
借物の羽織は德川様の紋　豆秋
借物の帶がいそいで結ばれず　おさむ
借物は借りつばなしの大掃除　滿潮
貸した物かやして臭れて訃の報せ　小松園
躾糸取つて優しく借してくれ　鮎美
借物の大きな影がうつる也　潮花
借物をよつてたかつてさわりに來　豆秋

席題「パーマネント」　選

切れ話パーマネントの頸しろし　某人
パーマネント今日は變つた連があり　白面人
パーマネント精神的な戀に生き　春巣
パーマネント千人針を頼まれる　聰夢
パーマネント神を無視した歩きよう　滿潮
二號さんパーマネントの夏も過ぎ　鮎美
愛の巣のパーマネントをのぞきに來　潮花
受付のパーマネントへ念を押し　鮎美
パーマネント一家支へる腕があり　白面人
漫才師パーマネントでよく喋り　紅多呂
自問自答パーマネントをやめぬなり　村句茂
パーマして兄と意見が合はぬなり　小松園
パーマネントあれも子を持つ母であり　風葉
スフを着てパーマネントを思ひ切り　潮花
終電車パーマネントは足を組み　銃人
（秀）パーマネントアイスクリーム買ふて去に　かほる
（軸）仲人にパーマネントはながめられ　豆秋

席題「行　水」　村句茂選

行水の好きな子供にも困り　聰夢
行水のぬるさに子持慣れてゐる　小松園
行水の順がもめてる子澤山　富士
行水の眼が追ふてゐる雲の足　万的
行水へ如露持つて來る五ッ六つ　白柳子
行水へ一雨來そうな空になり　富士
行水の表を豆腐屋が通り　紅多呂
行水の眞上を飛んだ戰鬪機　同
行水の裏を箱屋を連れた聲　某人
行水を上れば停電まだつゞき　滿潮
行水へ勤勞奉仕の子が歸り　かほる
行水へ速達が來る急なこと　綠雨
行水の顔だけ出してものを云ひ　默平
妻浴びる頃行水へ月があり　潮花
行水の闇夕顔のほの白し　鮎美
行水へ丹下左膳の子を呼んで　八九滿
行水の脊中は長いものに見え　おさむ
（秀）行水に落ちて來そうなぐろの實　白柳子
（軸）行水へまだ〳〵無駄のある勝手　村句茂

席題「祖　國」　八九滿選

排日へ日本人を意識する　斗風
日の出する海に靜かな祖國を見　鮎美
スキッチを祖國の聲に切り替へる　春巣
歩哨線祖國は月の昇る方　銃人
南氷洋ここも祖國の旗がある　白柳子
戰友に濟まぬ祖國の土を踏み　默平
祖國から今日君ケ代を聞く電波　村句茂
吾が血潮殘す祖國の旗の下　白柳子
大陸の風に祖國の旗がゆれ　滿潮
祖國いま旗に埋まる國となり　白面人
セパートが祖國のために走つてる　豆秋
建設の鍬へ祖國の夜が白み　万的
輸血する瞳にも祖國がよみがへり　鮎美
（秀）日の丸を立てゝ祖國の海を出る　潮花

兼題「撒水車」　綠雨選

撒水車一雨來そうな空見上げ　巨人
犬の仔へ水かけて行く撒水車　おさむ
逃げられぬとこで撒水車に出合ひ　銃人
撒水車を叱かつて行つた白ズボン　紅多呂
撒水車晝寢の家を見て通り　銃人
水栓へ後むきに來る撒水車　紫香
撒水車子供が後を追うて來る　万的
撒水車昨日のとこでよろけかけ　小松園
（秀）太陽の直射をうけた撒水車　富士

兼題「鉛　筆」　路郎選

鉛筆で採としつかり書かれたり　某人
鉛筆が折れてはかない旅の空　サイ
鉛筆で符牒儲けねばならず　八九滿
鉛筆で無事に居ますと案じさせ　小松園
鼻すすする音と鉛筆けづる音　風葉
忙しい日は鉛筆がすぐに減り　白柳子
鉛筆を削つてやつて字を叱り　富士
鉛筆を削る已れも小商人　斗風
鉛筆で豫算はかるくけづられる　栞
鉛筆をたしかめて出る儲け口　村句茂
雜談にきて鉛筆をおき忘れ　聰夢
家計簿は子の鉛筆をちよつと借り　豆秋
鉛筆がいつそ哀れな女文字　潮花
鉛筆をなめ〳〵出來た子の慰問　万的
鉛筆をなめて大工は板へ書く　白柳子
鉛筆も僕の心も尖りきり　鮎美
病篤し局の鉛筆みんな折れ　銃人
鉛筆のかたさ近視はうろたへる　八九滿
鉛筆を借つて吾家の地圖を書き　白柳子
失つた鉛筆課長が持つてゐる　紫香
鉛筆の4Bで十萬圓と書く　鮎美
（人）鉛筆で男勝りの判取帳　默平
（地）警察の鉛筆二本目も折れる　滿潮
（天）鉛筆は時に女の頬も突く　小松園
（軸）割りきれぬ數字鉛筆なめらる　路郎

鉛筆曰く僕の主人は哲學者　同

渡邊曉童君送別句會（今治）

八月十一日夜　於　文庫居　長野文庫報

入　社

非常時を一役買つて入社する　一風
目覺時計を忘れず卷いた新入社　心府
先輩が聊かおどす新入社　文庫
履歴書も要らぬ入社の任重し　同
新入社社長の趣味に合せる氣　同
入社してやつぱり癖が直らない　歌調
入社してお辭儀する人ばかりなり　悅太樓
入社の日社長の顔は遂に見ず　曉童
新入社問ひ度き人を物色し　向上庵
帽子掛にも順がある新入社　紫陽

送　別

瀨戸の風希望をはらみ浪速入り　仙海

川雜　**廣島支部句會**（廣島）

七月十八日　於　廣鐵倶樂部　植山九天氏歡迎句會　濱田久米雄報

日本、仲好し、逃足、香水、工場

伊勢の杉日本を語る姿なり　天作
突擊路大和魂だけの聲　同
日本の土有難い父祖の墓　白外郎
大陸は今日日の丸の日本晴　三郎
大陸へ正義日本の意氣高し　天國
國境の月に餘裕の日本趣味　麥作
快男子祖國日本の春に立つ　小歩危
五月鯉日本の空が澄み渡り　久米雄
日の丸の感激輕い命なり　須彌浩
又一人日本を脊負ふ子が生れ　良句天
日本刀同じ心に冴えわたり　須彌浩
仲好しは揃つた柄の簡單着　九千
引越してもう仲好しになつて居り　一葉
榮轉に子は仲好しが居なくなり　九千
方言のまんま仲好し馬が合ひ　麥作
仲好しの大聲で來るなつかしさ　紫浪
仲好しの俺もお前も運がない　小歩危
同んなじ柄が似合ふ仲好し　九天
仲好しの戰死へ涙ぐむ怒り　須彌浩
仲好しを見舞つて話まだ盡きず　久米雄
逃足へ一聲高いバナ、賣り　良句天
雨模樣スフ逃足になつており　伯峯
逃足の敗殘兵へ一機二機　久米雄
雜沓へ掏摸逃足の速いこと　白外郎
買ひ立ての香水人にもつけてやり　樂人
香水をかけて貰つて若返り　三日月
安つぽい香水の香が迫るなり　かなめ
香水が年を隱した社交界　清登詩
香水が男心を振り向かせ　久米雄
噂の娘香水でゆく涼台　九天
軍需工場が伸びる田の畦　同
故郷に工場が出來た便りが來　伯峯
居殘りの顔へ工場の灯が映り　樂人
一命を呑んだ工場の薄煙　須彌浩

川雜　**大鐵局支部句會**（大阪）

正本水客報

夏帽子、石鹸、齲齒、蚊帳、涼台、

海水着、花火、屋根

地下鐵を出る夏帽子眞白し　水客
退刻仕度シヤボンの泡を手にたつる　明坊
一人旅石鹸のさら出して吳れ　水客
石鹸を使はず歸る男の子　柳太
曇天がもどかしくなる齒の痛さ　万的
甲板の隅へ虫齒を押へに來　紫香
牌へ熱入れて虫齒がまた痛み　明坊
蚊帳ひとゝこ外して遲い飯にする　某人
蚊帳越しに氣安い人が話しに來　紫香
應接間蚊帳釣る音が聞えて來　春巣
蚊帳越しに海の香りが寄せて來る　水客
涼台うるさい男に立ち寄られ　水虹
今日も亦虎造になる涼台　不朽
涼台天文學者が一人居る　柳太
涼台ふつと男の口が過ぎ　某人
おしろいの匂が動く涼台　明坊
涼台ひとりで居れば涼し過ぎ　水客
明笛の主も出て來た涼み台　春巣
カメラへはまともに向かぬ海水着　幸路
派手な水着で仲々海へ這入らない　万的
健康な一家揃つて海水着　久枝
海水着母は笑つてばかり居る　春巣
海水着鳥肌だてたきり來ない　某人
花火見た歸りの背で子は眠り　久枝
遠花火プラットホームから見てる　万的
留守番は花火の音を聞いただけ　水虹
東の間へ花火しつかと括られる　某人
本當の氣持が云へぬ遠花火　水客
屋根の下仇同志の樣に住み　嘘川
空氣銃隣の屋根をねらつてゐ　同
屋根低い家の子丈夫に育つてゐ　幸路
國寶の屋根とは知らぬ鳩の糞　春巣
宣傳機都會の屋根へ何か撒き　苦樂公
家主また屋根を見上げた丈で去に　同
アンテナは隣の屋根を少し借り　同

川雜　**下關支部句會**（下關）

七月六日　於　國弘半休居　多田市多樓報

間違ひ、キャンプ、居眠、汗、
うす着、時、未亡人、星、海水着

間違のまゝを子供はおぼえこみ　殘月
間違えた下駄前のより品が落ち　白陽子
間違ひを笑ひの中に疊み込み　川平
間違ふたとこで手品を止しにする　不川
キャンプの夜みんな笑つて寢る　不水
キャンピング去年の杭に綱を引き　暢爺
キャンプ村寢たか靜かな山となり　藤市
キャンプ村日傘の下に圓く居り　仝
キャンピング飯の仕度へ役を割り　文福
居眠を大きく起す急停車　市多樓
居眠の書物を風がめくつてゐ　流星
食事する子の居眠りを危ながり　莞治
居眠つてならん訓話へ徹夜明け　柳月
一錢が店の居眠醒ましに來　比呂志
春の陽へ居眠りしてる高利貸　文福
汗のする肌着をぬげば蚊が來る　半休
遮斷機の向ふも夏の汗を拭き　泰山
汗出たか馬よ俺らも敵の空　市多樓
汗臭い香がしてる軍事便　陽峰
汗臭いシャツが息子の形見なり　仙波
年頃へうす着が一寸氣にかゝり　同
風呂上りうす着のまゝで話かけ　双龍
此の誤解時が解決するでせう　文福
一分の時も惜んだ汗の玉　流星
目覺しの時計が邪魔になつた夢　哲志
新聞で時の話題を生んでゐる　芥兆
時ならん鐘へみんな立ちあがり　十四夫
ポスターへ漫畫にされる時の人　半休
此子故などとあつさり後家を棄て　九呂平
未亡人何時かテリヤが好きになり　暢爺
後家さんと言はれて處を思ひ出し　市多樓
未亡人今日も淋しき日記なり　千頭坊
未亡人殘つた盆栽さびれ行き　九呂平
未亡人と見えず寶子にすゝめられ　代志久
未亡人世間の噂目もくれず　藤市
未亡人節婦の譽れたかく生き　白陽子
未亡人總てに涙脆くなり　きくの
亡き夫の寫眞へ子供座らして　双龍
あの星があるとこ父が居る所　九呂平
神となる一歩手前の星の下　不川
君戀ふて小緣にたてば流星　のぼる
海水着いまに戰地へ征く體　九呂平
海水着ついぞボートに乘つただけ　暢爺
元氣で出た海水着歸らない　市多樓
曲線美少し氣にして海水着　半休
海水着姉妹らしい色模樣　勇記
とりどりの色が浮いてる夏の海　米三
海水着陳列窓で涼しさう　柳月
海水着頭かず程買つて行き　仙波
文福

川雜　**蒙疆支部句會**（張家口）

七月十六日　於　柳路居　岩崎柳路報

藝者、花火、ピアノ

胸病む妓お稻荷樣へ手を合はせ　漫蹣郎
落ちそうに羽織着てゐる姉藝者　幽鳳
小指一本無くてお座敷いそがしい　四絃
氣紛れに藝者手紙を書いてみる　默人
好きな妓の今宵うれしい裾さばき　柳路
あゝ花火だ一瞬女の顔が白い　四絃
さようならさようなら夜空に花火があがる　同
宵祭線香花火へ子としやがみ　漫蹣郎

行水の向ふに花火の子が集ひ　柳路
磨かれたピアノへうつる百合の花　漫躊郎
執達吏ボーンとピアノを打つて見る　默人

榮轉の靜觀堂小川大佐を送る

七月廿三日

送別

別れ惜しむ隊長の眼と兵の眼と　桃水
見送りの兵が最後の擧手の禮　同
北の方嵐つのるへ君は征く　四絃
何は無くとも君まづ過せ今日の酒　同
送別に近づきになつた話も出　幽鳳
見送りは唯御大事に御大事に　同
送別會も一度船の名をきかれ　默人
今日知つて明日送別の友もあり　史人
送別會ひとりふたりは海を見て　清水
あの顏が見られなくなる汽車が發ち　同
又會へる輕い氣持で送つてる　麥秋
送られて居る人だけが知る娘が一人　松代
あの山も此病院も今日かぎり　同
お別れの辭儀へデッキは擧手の禮　柳路
轉任を校歌で送るステーション　同
事あらば沙漠の中でまた逢はむ　靜觀堂
句に始まり句に伸びんとす君と僕　同
短册を壁にのこして別れ告ぐ　同
換へられた大砲の向きへ君征くか　同
北へ行くと云ふへ鈴蟲しきり鳴く　同

八月六日

石鹼、布團

石鹼の泡を頭へ子は達者　柳路
おしぼりの石鹼臭し支那料理　同
性格が出てるシャボンの使ひやう　桃水
寢台車朝の富士見る紙石鹼　默人
掛聲で二階から布團降すなり　柳路
殿樣の短氣座布團蹴つて立ち　默人
座布團へキチンと座つた女の子　史人
なじみ重ねて布團の柄もおぼえて來　桃水

雜川　塗青支部句會（大阪）

七月十五日　於滿願寺　淺謙公報

山門、蚊、瀧、浴衣

乞食も山門へ來てほつとする　沼田
山門の仁王守衛の樣に立ち　今川
ひぐらしを山門で聞くハイキング　枝折
山門の夜の仁王にぎよつとしい　中谷
團服の汗山門の風を入れ　光路
山門で浮世を捨てる氣もなほり　中角
仁王だけ殘り山門暮れかゝり　光路
うちわもち夢うつゝにも蚊をはらひ　宇高
蚊に喰はれ何を好んで粹な人　御子紫
はこ庭におもちやの瀧が涼しさう　宮崎
ハイキング瀧まで行つて飯になり　村田
谷深く靜けさ破る瀧の音　坂田
瀧の音聞えて足が輕うなり　月草
河鹿の音聞えて瀧の近うなり　呑海
瀧津瀨の茶店のビール冷えており　唯榮
瀧つぼへアベック話すこともなし　中角
幸福な話へつゞく瀧の音　香林坊
悠然として瀧は千古の音で落ち　子元
炎天の街に目にしむ白がすり　中角
浴衣着て宵をどうするあてもなし　子元
皇軍へすまなく浴衣着て涼む　京詩
浴衣がけ橋のところへ出たくなり　香林坊
浴衣着てやつと仕事の氣を忘れ　河合
女房も浴衣は荒い柄がすき　光路

阪大川柳會（大阪）

八月二十五日　於會議室　丸島利生報

富士山、モンペイ、お絞り、紙幣束

商標の變な所へ富士櫻　方正
凱旋へ富士晴れて見え晴れて見え　同
紅燈の床の間に見る富士淋し　同
富士山を夜行で通る旅をもち　君女
富士山が見えて茶店のつつがなし　青一路
富士山も見ず新婚は戻つて來　同
富士山が書けて名士の役がすみ　利生

山中湖にて

モーターが逆さの富士を碎くなり　利生
機上からルッボの如く富士も見え　筑川
紺碧の富士見たり北齊の繪の如く　同
一人旅暫しは富士に氣を取られ　柳秀
一筆の富士は漢詩でうめ合せ　栞
モンペイに持つて生れた美しさ　青一路
モンペイは戀など知らぬ姿なり　同
モンペイを穿いても內輪に歩くなり　同
モンペイに所を聞けばよその人　春巢
モンペイはフエルトの草履輕くはき　同
モンペイはモンペイ洋裝止めぬなり　香附子
モンペイの一ト日ひなたに頬かひり　同
モンペイをとると母なり敎師なり　柳秀
モンペイをはいて訛りに遠慮なく　同
モンペイの後姿へ富士は晴れ　方正
モンペイのバケツリレーへ振るおいど　栞
早く歸れと二度目のお絞り　柳秀
遲刻して來てお絞りの冷いこと　春巢
お絞りのスフのタオルはあはれなり　同
お絞りを一人が云へばみんな云ひ　同
おしぼりへチップの多寡をふと思ひ　同
お絞りを呉れたは新婚當座だけ　青一路
おしぼりをとつて話をまたつゞけ　同
おしぼりを通り越して且那肌をみせ　同
おしぼりをとき〳〵メニューのぞかれる　栞
おしぼりへまだ飲みたらぬ顏があり　同
先づジョッキ通して擴げるお絞りだ　同
聘らしまつせとおしぼりに念を押し　路生
口だけ拭いておしぼり押し返し　同
移り香にあらずお絞りよい匂ひ　方正
盆歸り母がお絞り持つてくる　同
おしぼりをなげて返して支那料理　利生
おしぼりへあつさ加減の眼をつぶり　柳秀
おしぼりを出せば一瞥呉れたゞけ　青一路
生きものゝやうにおしぼり置かれてゐ　路生
おしぼりへあゝ歡樂の灯が點り　路郎
誘惑のはじめおしぼり手にうける　同
札束へ頭下げてる事になり　春巢
紙幣束の灰になる日を考へる　同
札束と知らずに馬は汗をかき　同
札束を貰つた時の話する　路生
札束はねぢ込むやうに入れられる　路生
札束で面はられてる面白さ　同
面を張るにしては札束少なすぎ　路生
こいで一萬圓やと紙幣束見せられる　利生
人間の弱さ札束に見透かされ　同
札束の前に貞操目をつぶり　同
金庫の中札束でなかりけり　同
札束へ飲まず食はずの話する　栞
銀行で見る札束は反古の樣　香附子
札束にも觸れず多額納稅者　青一路
逃避行札束持つて出たと云ふ　方正
莫迦にしてるわと札束突き戻し　路郎
青春はその札束へふり向かず　同

松坂倶樂部句會（大阪）

八月六日　戸田孤逢報

畫線、書齋、蠅、朝顏

畫線の下で女給の年齡をきゝ　白面人
仕事場の畫線何の飾りなし　方正
大店の奧に畫線一つゝき　孤逢
都會の呼吸畫線からも感じられ　同
畫線はアイロンかける丈の用　同
あの頃の家は畫線引いてあり　くもを
判を押す丈けに畫線ともつてゐ　路郎
書齋から見やるもの大阪の空　丹路
畫寢する場所も書齋の隅にあり　孤逢
徹夜した書齋の跡をそつと掃き　同
チラバッたまゝで書齋の朝がくる　同
筆のたつ頃書齋亂れかけ　同
この書齋クッション丈が威張つて居　生々庵
法律專攻書齋の主に親しめず　白面人
何の爲めか書齋をさがす妻となり　方正
書齋なぞいらぬ船場はよくもうけ　くもを
書を友に世に出ず役もくちて行く　三華
からつぼの頭を書齋で威す氣か　生々庵
書齋兼應接間兼寢る所　方正
買ひたい本の空想もよし書齋　路郎
一ページ讀むか讀まぬに書齋を出　同
椅子にした當座書齋に閉ぢこもり　同
書齋からラヂオを止めて呉れといふ　同
勉强か非ず書齋の負將棋　同
融通がきかず書齋へ追ひ込まれ　同
聞きとれぬ聲も書齋の人らしゝ　くもを
交番所案外蠅になやまされ　同
コック場はこんなに蠅が多いもの　生々庵
母ちやんの畫寢に蠅がお伴をし　同
又してももみ手で蠅はしのびより　同

御自分の頭の蠅でも追ひ給へ　同
一つだけ蠅も生命をもつてゐる　孤蓬
氣をつけの列へ舞ひ込む黒い蠅　同
運命のとりもち蠅の脚細し　同
十疊に待たされて蠅の行方を見　丹路
閑な女給の蠅が眼につき　同
生れては見たものゝ蠅は蠅　同
チフスの話題蠅のことにも觸れ　方正
蠅たゝきを取りにゆく間に居なくなり　白面人
蠅が來るまた來る病人云ひつゞけ　同
黒山の蠅もなれたと便り有り　三華
團扇を置くとやつてくる膳の蠅　同
淋しい膳へ肝癪な蠅　路郎
改札を蠅も一緒に出てしまひ　同
蠅叩くことを三男あてがはれ　同
寢るだけの家に朝顔からんでる　くもを
派出やかな色で朝顔かれてゆき　同
朝顔の咲いてる間勉強しな　同
アパートの朝顔小さく咲いてゐる　孤蓬
朝顔を手摺の長さ丈ならべ　同
一番の踏切朝顔恙なし　同
朝顔の寸は長女が記錄する　生々庵
アパートの朝顔隣の窓へ咲き　同
前線へ今朝の朝顔入れてやり　同
若人の夢朝顔の蔓に似て　丹路
恩給生活の朝顔が咲き　同
朝顔の趣味をハハーンと聞いて　方正
嬌態は身をくねらした朝顔ぞ　白面人
大輪の會へ屋上風がなし　同
朝顔の水云ひつけに引かへし　同
朝顔を卒業をして菊に凝り　三華
朝顔を樂しみに子は早寢する　同
朝顔の自慢も出來る鉢の數　路郎
朝顔の寸まで書いた綴方　同

八月二十日

呪、涼み、ママ

リードする二點を呪ふ應援團　角堂
呪はれた顔とは知らず鏡見る　同
話し合つてみれば呪はずすんだ事　くもを
呪はれてゐるのに儲けて居る噂　白面人
病床で女の愛に怖はくなり　同
呪はれた樣に一匹死んでる蚊　孤蓬
御土產の箱におさまるお菊蟲　同
呪からアジアを救ふ日本刀　同
妓から妓へ呪ひだけのこし　同
チブス菌カルカンに塗る瞬間よ　生々庵
呪はれて呪はれて呪はれて貯めた金　同
誰をどう呪ふ術なし又はらみ　同
呪はれて横丁のおめかが病んだ　美根子
呪はしいものに主人の碁道樂　同
夕涼み戰地の便り讀みきかせ　角堂
涼線をヘットライトが追つて行く　孤蓬
涼風はジョッキ一杯あけたころ　同
道頓堀こゝに涼みの人がゐる　同
濱へ來て涼めば戀にされちまひ　白面人
浴衣きて定期をもつて涼みに出　同
負將棋蚊にもかまれる涼み台　三華
涼し過ぎる程先約の部屋は風　くもを
チップとはこんなに利くか風が來る　同
氣弱ではとても通れぬ門涼み　美根子
夕涼み別れる橋へ來たりけり　同
內職の手に聞えてる夕涼み　生々庵
幾歲頃までママさんと呼ばせる氣　くもを
二度目のはママと呼ばと二階に寢　同
赤屋根の下にママ族住んでゐる　孤蓬
生活のやつれママだと云ふほこり　同
ママと云ふ港のバーのマダムゐる　同
鼻筋が通りママちやんまだ若い、　同
ママ午睡パパ靴下のお洗濯　美根子
パパ重役ママは國婦の會長だ　同
うちのママとつても映畫のファンなのよ　同
ママさんは會議父は御留守番　三華
ママさんに歩き振まで似てしまひ　角堂

有恒川柳會（大阪）

寺井鋭々報

沽券、入齒

若且那沽券に辛ひ戀をする　波夢造
奥深く沽券を誇る咳がする　同
大番頭沽券を守る卅年　羅漢
沽券だけ下げずに老舗左まへ　同
代用品汎濫老舗の沽券何處へ行く　雨月
會談へジョンブルの沽券崩れたち　同
退職へ沽券の髭をまだ殘し　鋭々
沽券一と度捨てゝ質屋の顔が利き　同
老妓には社長の沽券埒もなし　同
女房の總入齒見てこゝろ憂し　羅漢
金入齒お上の情であと廻し　同
入齒とも言へずキャラメル辭退する　波夢造
激論は入齒が飛んで鳧をつけ　同
わたしもと齒科醫入齒を拔いて見せ　同
入齒見せて唯笑つてる親父なり　雨月
總入齒釆配奥の間から振り　鋭々
いゝ咲呵金齒が奥で光る也　同
よく喋る仲居の金齒著苦し　同

七月二十七日

金庫、倶樂部雜感、陳情

金庫まで封印されて驚かず　羅漢
臨終にあわてゝ鍵を探す人　行人
新會社空の金庫も異彩添へ　三樂
主人だけ金庫の中味知つて居り　同
燒野原におゝ金庫は無事だつた　雨月
炊事場に金庫に似たる冷藏庫　同
金借りに行けば金庫が羨まし　鋭々
入齒して金庫の鍵を手放さず　同
金抱いていつそ金庫の中で寢ろ　同
子の代になつて金庫は大き過ぎ　至藝瑠
取れもせぬ証書金庫に二十年　同
頂上は金庫を買つた時であり　同
ダイヤルの文字は女房だけが知り　同
其の重さ金庫とあつて承知する　波夢造
にぎやかにはかなく金庫賣られ行く　同
整理した店を見守る大金庫　德二
イミテーションそれも金庫へ仕舞ひ込み　路郎
柄にない大きな金庫讓られて　同
社用だと倶樂部で烏鷺を闘はし　羅漢
倶樂部からお家へかへれば無難のに　同
倶樂部にて辛い談も聞かされる　三樂
大大阪茲に有り有恒倶樂部　雨月
外電で賑つて居るお晝時　同
有段者を額面に買つて盛んなり　同
講演會後列へ睡魔襲ふ也　鋭々
理髮室だけでは禿げた事に觸れ　同
商用の電話に將棋負けて置き　同
玉に勝ち將棋に勝ち運のよい日なれ　鋭々
一人切りか程淋しいとこもなし　德二
會員の電話交換手筋を知り　同
機密費と旅費陳情へふえて行く　雨月
赤門出陳情委員に上げられる　同
陳情へ純正理論負けちまひ　同
三流どこ陳情團で幅がきゝ　羅漢
陳情團のかへり熱海で解散し　同
紅何點陳情團に混つて居　同
賞與月要の陳情繁くなり　德二
陳情に今日も寢台なしの旅　至藝瑠
陳情へ腕の社長は叱つとき　同
涙には勝てず陳情容れられる　同
陳情を社長尤もと思ふだけ　鋭々
陳情へ水一ばいも飲まず立ち　同
陳情に端の一人が承知せず　路郎
陳情をみなまできかず御尤　同
陳情へ考へておくと言つたきり　同
陳情を大臣又かとも言へず　同
陳情へ誠は覺悟の人もゐる　同
陳情にその三等の賑やかさ　同
スリッパの足らぬ陳情團並び　同
出した茶ものまず陳情詰め寄せる　同
陳情へドアーを閉める音が冴え　同
陳情に代表一人腰をかけ　同

よつばし川柳會（大阪）

橋本綠雨報

友達、夕涼み

友達が減つてオールドミスとなり　五郎藏
友達と歩調が揃ふハイキング　セバ
友達の軍服姿けなるがり　秀峰
仲良しと見え浴衣まで同じ柄　富士
出征に後から行くと友の聲　山人
鄕里からの友達訛そのまんま　定志
黒い友今日も明日も同じやう　宮川
友達と九段で逢ふを誓ふたり　飛鶴
實戰を語る友達涙ぐみ　正雄
お互に手紙を見せて君と僕　白蜂
征く友をシッカリやれと肩を抱き　翠芳
親友へあんなことまで話したり　秋意
榮轉を祝ふ友達ゲット呑み　靜峯
友達の手柄話に夜を更かし　一重
友達が移轉の度に殖えてゐる　賀

友達が雄々し書いた日章旗　夢想
新妻の友へ挨拶固くなり　保郎
友達が今靖國の神となり　秀甫
引合に出される友は眞面目なり　旗風
友達はきはどいとこまで話し　輝翠
友達が持つてゐるよと子はねだり　巨人
友達と逢へば決まつて呑む話　芦穂
友達の親展馬鹿にしてかゝり　同
夕涼み明るいランプ嫌になり　榮次郎
夕涼み銀河に更けた事を知り　山人
夕涼み子供ボートを敎へてゐ　糸柳
夕涼みネオンサインにてれてゐる　定志
暑そうに見へぬ二人の夕涼み　翠芳
夕涼み詩吟も三味も聞く濱邊　秀甫
ベットリと夜露に濡れた夕涼　秀峰
大砲を射つてもらつて夕涼み　白峯
夕涼み流星を見て歸るなり　綠雨
夕涼み腰に團扇を着ける父　一重
何時迄も話がつきぬ夕涼み　夢想
夕涼み二人の仲を照らす月　吉現
夕涼み舟を流れに任せてる　利八
夕涼み團扇で星を數へて見　靜峯
夕涼み更けて家路の遠い事　保郎
半玉も連れてボートの夕涼み　朗舟
夕涼み將棋が台を占めている　正雄
死んだ子の話となつた夕涼み　巨人
イギリスの奴が奴がと夕涼み　白峯
夕涼み夜露があつたなと思ひ　綠雨
風上へ老母招じる夕涼み　旗風
メンバーが揃ひ賑ふ夕涼み　秋意
夕涼み戰死の報にシンとなる　五郎藏
夕涼み椅子でもめてる子澤山　富士
膝の子に團扇忙はしき夕涼み　輝翠
夕涼み道を挾んで話してる　同

はざくら川柳會（大阪）

八月十日　於　大阪鐵工所　北野明美報

大阪風景、草花、地藏盆、雜吟、虫

間違へば表へ出ろの新世界　南風
中の島蔭のベンチに二人切り　翠花
英靈の列がつゞいた御堂筋　明美
旅の窓栄の花畑を蝶々舞ひ　志保
花束を抱いて出船のドラを聞き　湊万
鈴蘭の花を封じた祝詞が來　潮花
泣かされる子もゐて樂し地藏盆　明美
番台の娘と話す書の風呂　南風
夢に見る君が歩哨の立姿　潮花
釣鐘も時局の波に身賣する　同
故郷思ふ瞳にユリの花開く　月都
月見草戀のふたりの眼に摘まれ　潮花
こうろぎへ故郷を思ふ野戰風呂　鈴峯
虫の音にしばしためろふ花鋏　雪舟
こうろぎは西瓜の種へ來て遊び　潮花

大阪鐵道病院句會（大阪）

北川春巣報

傘、時計、轉寢、手術、失言、評判、

驛前の煙草屋で時々傘を借り　幸路
背中の子一緒に傘を持つてゐる　春巣
夕立へ小兒科と書いた傘が出る　水虹
出しかけた時計へ猪口が廻つて來　骨減
決死隊時計のネヂを卷いて發ち　春巣
買つてやる親もうれしい腕時計　嘘川
檢溫の患者時計をじつと見る　鴻了
應接間流石時計の音もよし　柳太
喫茶店時計の方へ向いて待ち　久枝
先代を思はす時計の重い音　幸路
乘り遲れ驛の時計に合はせとき　美翠
大時計夕陽の中に繪ともなり　水客
轉寢の顏へまともに來た夕陽　ルミ
うたゝねの傍は母の針仕事　惠美子
うたゝねの兒は健康な臍を出し　久枝
なんぼ程寢たと轉寢起きて來る　柳太
手術すると言はれて近所言ひ廻り　五月
ナルコーゼ聞かせたくない事も言ひ　三公
育腸を醫者に委せて目をつむり　桂子
時計の音丈が生きてる手術室　万的
子の手術母も朝から食べずゐる　久枝
衆目にメス震へてる新赴任　しげを
記憶只白々々の手術室　万的
片方もしつかり塞ぐ眼の手術　水客
柔肌へ無殘なメスが運ばれる　嘘川
手術した手紙惡友から屆き　春巣
天井を向いて失言取消され　同
失言だ許せと猪口を突きつける　苦樂公
失言に柳眉俄かに唯ならず　嘘川
失言へ丸刈二人いきり立ち　水虹
失言に氣付く背にある煽風機　某人
評判にならずポスター破れてゐ　某人
評判を刑事一應當つて見　春巣

心身鍛錬
山は招く
吉野熊野國立公園
吉野群山
大台ヶ原山
山上ヶ嶽（大峯山）
爽快な北山峽下り

日曜日祝祭日
ハイキング割引
大阪上本町より——小兒半額
信貴生駒縱走　一円
石切より生駒山上へ　七十錢
信貴山より龍田・法隆寺へ　一円
多武峯より石舞台・岡寺へ　一円十錢
飛鳥史蹟めぐり　一円十錢
赤目四十八瀧より香落溪へ　三円
天理より長谷寺へ　一円十五錢
平城史蹟めぐり　八十錢
生駒山脈をめぐる卅五錢コース
——案内書進呈——

大軌・参急電鐵

後記

▼殘暑がきびしいからと云つて我等は一歩も暑さを避けたいとは思はぬ。暑さの眞ッただ中に飛込んで暑さを忘れる仕事をしてゐるからである。これこそ川柳による眞の悟りだと思ふ。

▼内は平沼内閣が總辞職して阿部内閣が成立した。外は歐洲戰亂が火蓋を切つた。川柳は生きてピチピチしたものをキヤッチして時代の句たらしめねばならぬ。どんな時にどんな句が生れたか。それを知るためにも報道に批判に少しくページを裂いて覆かねばならぬ。「内外時事」を新設した所以。

▼「社會ページ」を新設して報道と批判をやりたいと思ひながら誌面の都合でつひのび〳〵になつて來たが、次號あたりから實現させたいと思つてゐる。

▼昨年の川柳忌には私は北支蒙疆の旅に出てゐたので留守部隊ですべてことを運んでもらつたが、ことしは落ちついて「川柳忌」を修するつもりだ。

▼本號は渉野木介氏の傳太から寄せられた「ツンドラとトナカイ」外に雜文山積のありさま。

▼石井白面人、戸田孤逢兩氏の川柳的旅行記「肥的痩的一塊兒的三天」は輕快な旅日記として興味が深い。

▼本誌月評や座談會の家元だけに、「川柳一ト筋」は同をかさねる毎に斷然好評、遠く離れてゐる人達は出席が出來ないのを殘念がつてゐる。第一回は丹路居、第二回は亜鈍居、本號掲載の分は里十九居で開催した。

▼福田雨樓氏選「寢台車」は遂に乘遅れとなつたので次號發表とした。諒承ありたい。

▼記事輻輳で掲載し得なかつたもの、岡田某人氏の「具鈴」高鷲亞鈍氏の「川柳仁義」と拙稿「川柳類題と例句」。寛恕されたい。

▼今治の渡邊曉童君を招いて營業部の主任とした。八月十六日着阪、翌日から出社して營業川柳人としての第一歩を踏み出した。同君の少しでも働きよいやうに格別の御眷顧を乞ふ。

▼發行日を漸次早めたいと思つてゐるので、すべて締切を嚴守されたい。

（路郎生）

募集

第十六卷 第十號課題
九月十五日締切
（十句以内）

停年　大島濤明選
猿　高峯柳兒選

第十六卷 第十一號課題
十月十日締切
（十句以内）

夕焼　森東魚選
垢　西いわを選

毎號募集

近作柳樽（雅吟切）　麻生路郎選
各地柳壇（會報）
文章（評論研究感想吟行漫文漫筆）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は本誌會員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清書の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

定價

一部　金三十錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

廣告料

本誌への廣告に就いては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

昭和十四年九月一〇日印刷
昭和十四年九月十五日發行
第十六卷　第九號
（毎月一回十五日發行）

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）
川柳雜誌社
電話土佐堀（三三三三）（八一六三）番
（八一一四）番
振替口座大阪七五〇五〇番

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます御註文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

禁無斷轉載

社關係の人々（いろは順）

主幹　麻生路郎

賛助員
池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　田中長二　嘉納純　長崎柳秀　長野牛太郎　長村晴作　藤濱　藤本卯之助　顯原退藏　浅田一　宋弘巖太郎

客員
鳥山一歩　沖野岩三郎　大島濤明　大谷五花村　亀井晟修　川上三太郎　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　田谷脇素文　高生九鉄郎　尾亮雄　窪田銀波樓　山本雨迷　安井久留美　前田雀郎　笹田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　姪子省二　藤里好古　小林不溟　森東魚　不朽洞會員　橋本緑雨　高橋かほる　福田山雨樓　西田仲樂　永田里十九　奥村丹路　岩崎柳路　寺井鋭々　大西八歩　★北山悟郎　水谷鮎美　尾潮栗香　丸坂形水花　大櫻某人　岩崎松代　岡田雙虎　平佐中雨　田月三造　増元翠陽　藤岡至藝　橋本波少瑠　松下小柳子　西須紀太　後藤いわを　宮岡白峰　石曾根民郎　中西おさむ　史風　古弗客　水生鳥　正本　黒川紫香　高橋美鐘　丸田夕裡　堀沒食子　村松夢　姫水車　市田水滿　吉塩人　妹尾八九　崎豆秋　春元紀　橋本至　波藝　平造　田井斗　澄由布　翠陽　酒井天野　ト居

支部と幹事

道頓堀支部（大阪市）　庄萬とし
九三會支部（大阪市）　北山悟郎
雨館支部（雨館市）　亀井晟修
高知支部（高知市）　國澤春水
梅田支部（大阪市）　水谷鮎美
籔川支部（島根縣）　尼絲之助
鳥取支部（鳥取市）　中島鐵州
松山支部（松山市）　矢野紅之麿
天王寺支部（大阪市）　妹尾八九潮
鶴町支部（大阪市）　岩橋双虎
御池橋支部（大阪市）　西いわを
松江支部（松江市）　勝谷山川皂
大織局支部（大阪市）　正本水客
愛媛支部（愛媛縣）　荒井英賀夫
今里支部（大阪市）　土塲沒食子
今治支部（今治市）　馬野文庫
光笑會（大阪市）　永田里十九
竹原支部（廣島縣）　黒本芳泉
十三支部（大阪市）　淺野牧人
兵庫支部（神戸市）　三崎樂幸
廣島支部（廣島市）　濱田久米雄
名古屋支部（名古屋市）　吉田水車
北大阪支部（豐中市）　黒川紫香
港支部（大阪市）　多田一波
下關支部（下關市）　多田市多樓
北鮮支部（清津府）　三鴨美笑
蒙疆支部（張家口）　岩崎柳路
上海支部（中華）　植山九天

賣捌書店

（大阪）
参文社　三越書籍部　明文堂　朝日ビル書店
其他市内各書店（東京）東京堂　巖松堂　吉岡書店
玉森堂（名古屋）伊勢屋　三昧堂（神戸）米田寶文館（雨館）
石塚（西都）三宅（名古屋）靜觀堂

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
昭和十四年九月十五日印刷納本　昭和十四年九月十五日發行

川柳雜誌　NO・188　定價金30錢　送料壹錢

ニキビ

にきびとり

美顔水

吹出物にゼヒ此藥を

ニキビ吹出物に非常によく効きますので大評判の藥です。ゼヒお勵めしたい藥！

美容藥としても

この藥は美容藥としても大へんよく入浴後や洗面後等にお用ひになるととても爽快で、ニキビ吹出物を防ぐのは勿論、キメが細かにツヤを增しお肌がスッキリと美しくなるので美容藥としても盛んに愛用せられてゐます。

蚤蚊南京虫其の他毒虫てカユイ時にもとても便利な藥！

アブラ顏のお化粧下に最適！

化粧用美顏水